「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」報告書

ホンネを聞かせて！
あなたと仲間のキョウトぐらし

2013年2月

公益財団法人京都市国際交流協会

「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」報告書　ホンネを聞かせて！あなたと仲間のキョウトぐらし　公益財団法人京都市国際交流協会

はじめに

「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」について

本調査は、京都地域で暮らす、外国にルーツがある人たちのコミュニティの実態調査です。調査は、2011年度〜2012年度にかけて、(財)自治体国際化協会「地域国際化施策支援特別対策事業」の助成金を受け、京都地域で活動する「きょうと外国人支援ネットワーク」の協力を得て協働で実施しました。11のコミュニティのリーダーもしくはメンバーにインタビューを行い、その調査報告書としてまとめたのが本誌です。

京都市には、約41,000人の外国人が生活しています。そんななか、外国人どうしが互いを支え合うネットワークが形成されるようになり、信仰、子育て、高齢化、教育問題など、地域に暮らす外国人のニーズに応じて生まれたネットワークが「外国人コミュニティ」と呼ばれるようになりました。

しかし、「外国人コミュニティ」の言語的・文化的背景には、「外国人」という一語ではくくることのできない多様性があります。日本で数年間にわたって学ぶ留学生、日本人の家族の一員として暮らす人、ルーツは外国にあるものの長年日本で生活してきた人、日本人ではあるが戦後長く日本に帰ることのできなかった人たち等々もいます。「外国人コミュニティ」とは、そのように国籍を超えて多様な言語的・文化的背景をそなえた人たちのネットワークです。

本誌に掲載したそれぞれのインタビューからは、自身のライフヒストリーやコミュニティの活動の様子なども含めて、京都で暮らす外国人、あるいは外国にルーツのある人たちの視点で語られた日本や京都が見えてきます。あなたの近くにも外国人コミュニティがあることを知り、驚かれるかもしれません。

言葉や文化が違っても、私たちは互いを知り、理解しようと努力することはできるはずです。未来の京都をともに生きる私たちが、互いの声にもっと耳をかたむけ、いっしょにできるなにかを探すきっかけになれば、それぞれの人生を有益に、そして豊かにすることできるのではないでしょうか。そのような想いでコミュニティの声を集めて完成したのがこの報告書です。

調査概要

期間	2011年4月〜2012年3月
対象	京都市在住のニューカマー（90年代以降に来日した外国籍市民）」を中心に、現在、拠点が京都市内にあるコミュニティや「きょうと外国人支援ネットワーク」に参加する計11コミュニティ
目的	● 多文化共生に向けての取り組みのための基礎調査 ● 京都の在住外国人コミュニティの活動やニーズの発信 ● 外国人コミュニティとのネットワーク構築
方法	コミュニティのリーダーもしくはメンバーへのインタビュー
協力	きょうと外国人支援ネットワーク（40ページ参照）

もくじ

はじめに
「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」について …… 1

インタビューの記録 …… 3

01 京都宣教教会 …… 4
02 京都PAG-ASA（パグァサ）フィリピン人コミュニティ …… 7
03 京都インマヌエル宣教教会 …… 10
04 夕陽紅（シーヤンホン）の会 …… 13
05 外国人女性の会 パルヨン …… 17
06 インドネシア人女性コミュニティ An-nisa（アニシャ） shalihah（シャリハ） …… 20
07 在京都ベトナム留学生青年会 Hội（ホイ） Thanh（タン） niên（ニェン） sinh（シン） viên（ヴィエン） Việt（ヴィエト） Nam（ナム） tại（タイ） Kyoto（キョウト） …… 23
08 ロシアのクラブ …… 25
09 関西フランス学院APEK …… 28
10 京都インド人協会 Kyoto Indian Association …… 31
11 NPO法人 京都コリアン生活センター エルファ …… 34

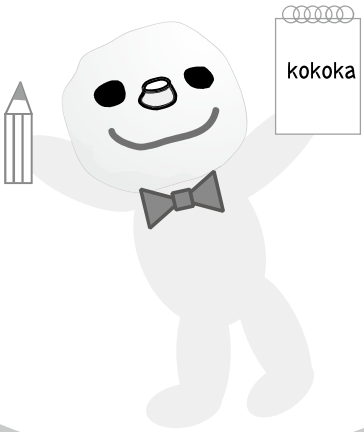
インタビューを終えて …… 37

お隣さんは外国人――京都の多文化社会の実像に迫る　毛受 敏浩 …… 38
きょうと外国人支援ネットワーク　車座トーク …… 40
世界から京都へのひとことメッセージ @kokoka …… 42
世界からやって来た　あなたの身近なお隣さん！ …… 44

「つながり」の時代、再び ――あとがきにかえて　岡本昌也 …… 47

京都地域外国人コミュニティ 基礎調査

インタビューの記録



インタビュー 01

京都宣教教会

韓国人牧師と日本人の奥さんが、キリスト教を信仰する人たちとともに2004年1月に設立。中国人留学生がおもなメンバー。ふだんの活動は、礼拝、伝道、文化活動（民族舞踊や演劇など）、ボランティア活動、留学生支援（進学・生活相談、バザーの開催など）、日本語、英語、韓国語教室を開催。

メンバー…… 約150人
構成 …… 約90%が学生、男性30%／女性70%、80%が20代

話し手 **金 銀姫**（キム・ウニ）さん
中国吉林省出身で母語は朝鮮語、介護施設勤務

東福寺の近くの東山区福稲にあるキリスト教の京都宣教教会には、中国人を主とした留学生たちが集まります。日曜日ともなると、礼拝が終わったあともその多くが教会に残り、みんなで食事を楽しみ、交流し、社会活動に従事する一日をすごします。
自らが日本に留学経験のある牧師ならではの教会活動かもしれません。立命館大学に留学し、現在は介護福祉施設で働く金銀姫さんの職場に伺い、教会のことや、日本での生活について話を聞きました。

金 銀姫さん

日本に来たきっかけはなんですか。

金●留学で2006年に来ました。出身は中国東北部の吉林省延辺朝鮮族自治州です。日本語は中学校から習っていました。中学校を卒業し、日本語を学ぶ専門学校に進学しました。しかし、専門学校を卒業しただけではなにも仕事の役にたたないだろうと、日本での勉強を父が勧めてくれたのです。

神戸の専門学校で日本語を学んだあと、立命館大学産業社会学部に2007年に新設されたばかりのメディア社会専攻に入りました。卒業論文のテーマは「韓流ドラマが日本でなぜ流行ったか」です。

金さんは朝鮮語と中国語、それに日本語が話せるのですね。

金●ええ。私は朝鮮族で母語は朝鮮語です。中国の学校を卒業するまでは、ほとんど朝鮮語ばかりで、中国語はあまりじょうずにしゃべれませんでした。日本に来て漢族の中国人と接するうちに中国語も伸びましたが、いまも中国語では伝えたいことが伝わらないときが多いんです。中国人の友だちからは、「あんた、日本語でしゃべりや」って言われます。

誘われて、最初は軽い気持ちで教会へ

京都宣教教会には、どのような経緯でかかわることになったのですか。

金●親戚に「中国人が集まるから」と誘われ、日曜日にいっしょに教会に行ったのがきっかけです。最初から信仰していたわけではありません。忙しいし、アルバイトがあるのにと思ったり……。

そのころは一人暮らしだったのですが、留学生で家にいる時間が少ないので、家賃がもったいない。そこで教会に通っていた同じ朝鮮族のお姉さんといっしょに暮らすようになりました。彼女が日曜日になると教会に行く。それについて、毎回行くようになりました。だいたい1年くらい経ってから、私も「これは本物だ」って思って。（笑）

もともと信仰心があってキリスト教会を探して来た人は、一人か二人。遊び気分で友だちをつくりたい、なにか助けてもらいたい、そんな思いから来始める人が大半ですね。

中国人留学生がメインの教会だと聞いています。金さんと同じ朝鮮族のメンバーが多いのですか。

金●多くは漢族の留学生です。朝鮮族はいま20から30人のあいだ。少ないです。京都に来ている朝鮮族そのものが少ないので。

教会で一日をすごす日曜日

金●日曜日の午前礼拝には130人くらい集まります。3分の1の人が午後も残って教会や教会周辺の掃除をしたり、いっしょにご飯を食べたりしています。夜の10時くらいまでいる人もいます。

日曜日は、一日中ほとんど教会にいるのですね。

金●そうです。教会に来ている人たちは一つの家族だという思いで、日曜日の一日をすごします。

この前の日曜日の午後は、鴨川沿いにごみを拾いながら四条通りまで行って、祇園でチラシを配り、賛美歌を歌って路傍伝道をしました。

グローバルなメンバーの心のささえ

教会に来る人のほとんどが留学生で、牧師先生も元留学生。先生ご夫婦は、信仰面だけでなく生活のすべてを見渡して接してくださる、日本人である奥さんが、ご近所といろいろ折衝してくださっていると聞いています。

金●はい。教会には主に中国、他に日本、韓国、タイ、インドネシア、それにいまはジャマイカからも来ていて、「ここはほんとうにグローバルなところだ」と言われます。

先生ご夫婦は、私たちのために一所懸命です。生活においても、いろいろなことを心配してくれています。

私は日本に来ていま5年半くらいになりますが、中国に1回も帰っていないんです。じつは、私はそういう部分が弱いんです「家に帰りたい」、「お母さ

んとお父さんのところへ帰りたい」。だから、夏休みや冬休みになって周りのみんなが帰っているのを見たら、すごくつらいんです。そんなときにいちばん頼りになったのが教会でした。自分の家みたいだから、そこにいるときは、そんなつらい思いを忘れるんです。

先生のお説教は、中国語ですか。

金●日本語です。日本に来たばかりの人は日本語ができないから、中国語の通訳が必要です。英語と韓国語の通訳も1人います。みんな学生たちがします。

先生は、ほんとうは中国に行って宣教したかった。ですが、いまの状況では、韓国人が中国に行って宣教するのはとても難しい。それで日本に来て、中国人に向けて宣教しているのです。じつは、私も将来、中国での伝道を夢見ています。

やはり中国を意識されているのですね。日本の社会に対する思いを聞かせてください。

京都で感じた外国人への壁

金●神戸でアルバイトをしていたころは、周りの方にいろいろ助けてもらいました。とてもやさしかったので、「日本人はやっぱりやさしい」と思いました。

そのあと京都に来て、はじめて壁にぶつかって……。アルバイトを探したのですが、みんな断られて、「外国人に対する、こういう反応があるのだな」と、ものすごく感じたんです。

京都は違うと思ったのですね。

金●ええ。日本語が上手でもだめ。日本人とかかわるなかで、「やっぱり外国人に対しては、神戸と違うところだ」、「ちょっと距離があるな」と感じることがたくさんありました。

経験があるから アドバイスできる

金●京都での最後のアルバイトが料亭でした。年配の方がたが多く、厳しかったのですが、そこで完全に日本人の働き方、仕事に対する態度などを知ることができました。それに、怒られながらも前向きにがんばっていたら、1年くらい過ぎて、私に対する態度が変わってきたんです。私を信頼してくれているという感じでした。

そんな悩みを経験してきているので、いまでは新しく京都に来た人たちから教会で相談を受けても、「そういう経験は、私もしてきたのよ」と言える。

じつは教会の先生も、留学生として日本に来て、私たちがしていた皿洗いなどのアルバイトもすべてやってこられた。だから、私たちの気持ちがすごくわかるんです。

中国人として 認められたい思い

金●レストランでアルバイトしていたことがありました。中国人留学生ではじめて採用されたのが、私と私の友だち。3年間くらい働きましたが、そこのチーフが最後の最後になって私に言ったのが、「あなたたち2人を見て、違うんだと思った」。それまでの中国人に対するイメージが悪かった。私は日本人にそういう思い込みをさせないために、必死だったんです。足りない部分もあったかもしれないですが。

朝鮮族は韓国の影響を受けるから、生活習慣も、服装も、流行りも、考えも、微妙に漢族の中国人とは違うところがあります。だけど朝鮮族には、「私は中国人だ」という意識もあります。韓国人が、「あなたも結局は韓国人だ」と言っていたら、「私は中国人だ」と。(笑)そういう教育を受けたからかもしれないです。

金さんはいま、在日韓国・朝鮮人の高齢者をおもな対象とした施設「エルファ」*で働かれています。就職は日本でしようと思っていたのですか。

金●大学を卒業して、それだけで帰る

教会主催の「異文化体験デイ」で、海苔巻きづくりを紹介

教会主催の「異文化体験デイ」で、チョゴリのファッションショーを開催

のはすごくもったいないと思ったんです。学校に行って学んだものを、日本で活かさないと。このまま中国に帰ると、またゼロから始めないといけない。それでは意味がないと思ったんです。

一から飛び込んだ介護の世界

金●大学ではメディアに興味があって勉強したのですが、「興味だけではだめだな」と思いました。(笑) 興味は興味でいいのですが、勉強しているうちに、「就職はメディアじゃない」と思ったんです。

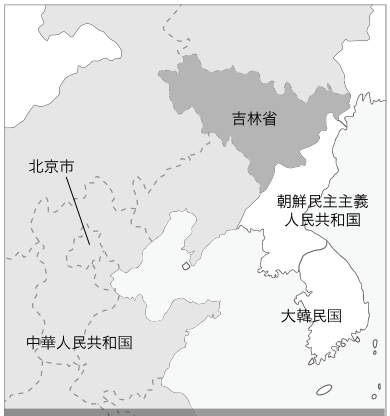
すごく悩んでいるときに、この近くの特別養護老人ホーム「故郷の家・京都」でアルバイトをしたことがすごくよかった。料亭のアルバイトも年配の人といっしょでよかったように、やっぱり年配の人が好きなんですね。その「故郷の家」でエルファの利用者に出会いました。通っていた立命館大学の近くにもエルファの事業所があって、「遊びに来て」と言われた。そうして、はじめてエルファに行ったときに、ここが好きだと思ったんです。

介護の仕事はアルバイト経験だけ、それも補助だったので掃除程度です。年配の方たちと接してはいても、介護の技術的なことはぜんぜんわかっていませんでした。エルファにくると、食事、お風呂、コミュニケーション、いろいろなことを全部しないといけない。はじめて、ほんとうに介護の世界に入りました。

介護は相手を受け入れる仕事

金●エルファにデイサービスを受けに来る方がたは、しっかりしている人、障碍のある人、病気の人、身体が不自由な人といろいろです。だから、コミュニケーションのとり方が一人ひとり違います。すごく忍耐力が必要です。

最初のころの私は、主導的に接してしまっていたんです。そんなとき先輩から、「介護というのは支援だから、その人たちの残った能力を活かすのが私たちの目標です。代わりにしてあげるのではないんですよ」と言われた。それからは、その人が残している機能をうまく活かしながら、ここに来て楽しく時間をすごせて、いい思いをしてもらうにはどうしたらいいかを考えるようになりました。それに、ここの人たちは在日韓国・朝鮮人だから、その民族の文化などに配慮しながら接しようとか、そういうことを考えるようになりましたね。



金さんの出身地、吉林省

教会と職場を両立させる生活

教会の活動と介護の職場は、どこかでリンクしているのですか。

金●私たちの教会はボランティアで「故郷の家」によく行きます。介護はしませんが、たとえばクリスマスには教会のみんなで「故郷の家」で踊ったり歌ったり、日本語で劇をしたりします。教会周辺にある鴨川でのゴミ拾いなどもしています。そういう社会活動を活動の根本精神にしていることでは、共通していると思います。

教会の活動資金はどうしていますか。

金●いまは自分たちの献金だけでやっています。ご飯をつくるなど、教会で使ういろいろなお金をまかなっています。

いま、いちばん問題になっているのは建物のこと。もともとは倉庫だったので壁がない。歌声などが響いて、やっぱりご近所に迷惑かけて……。これからも信徒は増えるから、早くもっと広いところに引っ越さないといけない。でも、みんな学生だからお金がないんです。

料理もみんなでつくるのですね。

金●はい。日曜日に教会でつくるのは中国料理が多いですね。学生たちが自分で考えて、150人ぶんくらいを……(笑)。いろいろな国のいろいろな地域から来ているから、料理も多彩です。朝鮮族がつくった料理は辛いって。(笑) キムチもよく食べています。先生が韓国人ですから。

2011年9月24日(土)
エルファ (京都市南区東九条北松ノ木町)にて

＊エルファについては、34ページ、南さんのインタビューを参照。

インタビュー 02

京都PAG-ASA（パグァサ） フィリピン人コミュニティ

タガログ語で「希望」を意味するPAG-ASA。PAG-ASAは、カトリック河原町教会を拠点として活動する京都在住の約70名のフィリピン人が運営する組織である。

メンバー…… 約70人
構成 …… 男性20%／女性80%、40代50%／30代40%／その他10%。 約80%は家族連れ

話し手 **杉山カリサさん**（女性）
フィリピン、レイテ島出身。飲食店勤務、コミュニティ通訳

京都在住のフィリピン人コミュニティであるPAG-ASAに所属し、コミュニティ通訳も務める杉山カリサさん。日本人配偶者からのドメスティック・バイオレンス(DV)を克服した経験もあります。DVに苦しむ人は少なくありませんが、外国人だからこそ直面する問題もあるようです。勤務先にお伺いし、話を聞きました。

杉山●私が生まれ育ったのはフィリピン中部のレイテ島です。日本に最初に来たのは1990年。21歳のときでした。

興行ビザで日本に

杉山●1985年ごろから、若いフィリピン人のあいだでは女性、男性を問わず、エンターテイナーとして日本に行くことがブームでした。私もフィリピンで2年間、ダンスの練習をし、ライセンスをとって日本へ来ました。就労ビザの有効期間は3か月だけでした。

日本に来る前には、日本にどんなイメージをいだいていたのですか。

杉山●戦争のことを祖父母から聞きいていたので、私自身の日本のイメージは、とても悪かった。祖父は日本軍の憲兵隊に捕まったこともあったそうです。

でも、日本に行ったらお金持ちになれる。両親ががんばって働いても生活はたいへんだから、私がなにかしなければと考えていました。だから、日本の大きなホテルでいい仕事があると誘われたとき、親の反対を押し切って行くことを決めたのは、自分自身でした。

妊娠、帰国、再来日

杉山●仕事の話は、半分はうそでした。踊りではなく、水商売の仕事でした。でも、そのときに旦那さんと知り合って、妊娠してしまった。仕事の契約で来ていたので、日本でもフィリピンでも、それがペナルティになりました。

妊娠して、やっぱり親には話さないといけない。気持ちを落ちつかせるために、両親に相談しました。両親は、「なにもいらない、その体のまま帰りなさい」。それで妊娠7か月を過ぎてフィリピンに帰り、罰金を払いました。

でも、子どもがフィリピンで生まれたら日本国籍をとるのがたいへんだから、その前に日本に戻るように旦那さんに言われた。それで、2回めは配偶者ビザで来ました。

最初の配偶者ビザは半年間で、次は1年。その次が3年間。だんだん延びました。2人めの子もできて、2年めまでは、私は幸せでした。

夫のDVに10年もの間、悩む

杉山●11年間の夫婦生活で、幸せなのはこの2年間だけ。あとは旦那さんのドメスティック・バイオレンス（DV）に苦しみました。子どもは3人、4人と生まれましたが、私はDVの被害者として8年間ずっと悩んでいました。

いつも束縛されていて、一人で買い物にも行かせてもらえない。旦那さんは私を自分のロボットみたいに思っていた。日本語の勉強も許してもらえませんでした。「なんのために勉強するのか」と。幼稚園からの連絡を読むのも、こっそりトイレで辞書を使って……。いま考えれば、私が日本語を勉強していろいろなことができるようになるのが嫌だったのね。旦那さんは、私の周りにフィリピン人の友だちがいるのはもちろん、日本人も嫌がりました。

なんとか教会に行けるようになったのは8年めの1998年。子どもが入院して、その付き添いで、それまでより自由に外出できるようになったからです。

私たちフィリピン人の約80パーセントはカトリック教徒です。だから外国に行って、まっさきに探すのは教会です。そこで友だちができて、情報をもらえる。だから、旦那さんは私をそこに行かせたくなかったのでしょう。

1枚のちらしがきっかけで支援組織へ

杉山●そうしたところ、住んでいた地域の役場からのお知らせがありました。タガログ語で、「問題がありますか。悩んでいますか」。そのちらしを友だちが私に内緒で渡してくれました。悩んでいるってわかっていたからね。

日本に11年間いましたが、そのときの私は日本語があまりできなかった。その友だちが電話を掛けると「福祉課にまわしてください」とだけ言われました。それで、どうしても我慢できなかったとき、福祉課に電話しました。

私は一所懸命、日本語を話そうとしたけど、泣きながらだったからか、福祉課の方は「英語でもいいか」と聞いてきた。英語も少しわかるし、どうしても助けてほしかったので京都府国際センター*1を紹介してもらいました。

でも、英語ではなくてやっぱり母語のタガログ語がいいと、泣きながら訴えました。「わかりました。こんどは京都YWCAのAPT*2につなぎます」と言われた。そこでやっと、タガログ語ができる人と、はじめてゆっくり話すことができた。

DVなんてわからなかった私は、ただフィリピンに帰りたい、それだけを言い続けました。APTの方に、「あなたはDVの被害者だよ」と言われた。最初は、「なんでかな、夫婦のふつうの問題だろう」くらいに思っていたから。

DVは、被害者が被害者であることを自覚できないケースが多い。相談に踏み切って、対処に踏み切れるまでがたいへんですね。

PAG-ASA主催のクリスマスセレモニー

DVだと納得するまで2年かかりました。やっぱり子どものこともあるし、そんなにかんたんに逃げられない。11年間も住んだ家の玄関から一歩出たら、次はどんな生活があるのかとか、不安だらけでした。

シスターの言葉で離婚に踏み切る

杉山●カトリック教会が離婚をアドバイスすることは、ほんとうは許されていません。でも、そのときシスターから、「あなたはいつまで我慢するの」と聞かれた。私は、「子どもたちが大きくなるまで」と。「でも、コップに水をずっと入れると、どうなりますか。あなたの頭もそうなります。ずっと考えていたら、あふれてしまいますよ」。

私もたぶんノイローゼになっていたのでしょう。もし自分の頭がだめになったら私と子どもはどうなるのか、それだけ考えました。私がしっかりしないと子どもがかわいそうだと思いました。APTに「いまから出ます」と電話して、次の日に行きました。それまでずっとAPTは待っていてくれました。

決めるまでが自分とのたたかいでした。旦那さんのことはもうどうでもよくなっていた。子どもは離さないと言われていた。でも、ほんとうは自分が面倒を見られないから、脅し文句にしているだけだった。もっともっと早くに出たらよかったと、いまになっては思います。

2年間相談してもらっていたAPTからは、「家を出るとき、パスポートはぜったいに忘れたらあかん」とアドバイスをもらっていました。

婦人相談所から母子寮に

杉山●教会とAPTに助けてもらい、婦人相談所での保護をしばらく受けました。期間はふつうなら2週間です。私には子どもが4人いて、手元になにもないまま家を出たから、相談所には結局、1か月半いました。

婦人相談所では、ごはんも用意してもらえ、ゆっくりといろいろなことを考えました。同じように悩んでいるお母さんと子どもたちもいて、考え方が違ってけんかになったりしましたが。

次の一歩は母子寮探しでした。寮にいっしょに入れるのは、ふつう子ども2人だけです。私は4人いたから、あちこち探すことになり、とてもたいへんでしたが、APTの助けでなんとか母子寮に入ることができました。

母子寮には2年6か月。私には仕事がなかったので、生活保護をもらいながら子どもたちは寮から学校に通いました。アパートに移れたのが2004年。

母子寮に入って3か月めからはアルバイトを始めました。いちばん下の子を7時前に保育園に預けて、あとの3人を学校に行かせる。母子寮の生活もたいへんでしたよ。みんな一つ屋根の下で、婦人相談所よりもきつい。

子どもたちのけんかが激しかった。

杉山●そう。うちは男の子2人、女の子2人だから、女どうしでもね。

日本語で自分の気持ちを伝えたい

杉山●もちろん、お母さんどうしの問題もあります。子どもたちが外でけんかし、「外国人だから、話にならない」と言われたこともあって、心が痛んだ。どうしても日本語を自分で話したいと思い、「私は言いたいことがある」と、寮長先生に自分から言いました。

そこで、母子寮の先生といっしょにYWCA・APTに相談して、日本語の勉強を始めました。日本語はまだそんなにわからないから、YWCAのいちばん下のクラスからです。きょうは何時に起きたか、なにを食べさせたか、そんな日記を書くことから始まりました。

それから自分の言いたいことを少しずつ、ローマ字で書けるようになりました。日本語の先生に、こんなことを言いたいけれど、どう書いたらよいかと聞きながらでした。

母子寮で娘がいじめられた時期があった。先生にお願いして、「外国人だけど、私も日本の市民として子どもをここで育てるから、人間としてみんなと仲よくしたい」と、自分の書いた文章を周りのお母さんたち、みんなの前で読みました。

離婚後、旦那さんからの援助はまったくなかったのですか。

杉山●ぜんぜん。母子寮で生活保護とアルバイトで生活していました。

不備はあっても日本の社会保証制度に助けられた

杉山●これは私がとても言いたいことですが、被害者なのになんで私が逃げなくちゃいけないの、なんで私が名前を変えなあかんの、と思います。家を出て母子寮に入ったとき、「DV被害者だから、本名を使ったらあかん」と言われて、しばらく名前も変えました。住民票の移動もできないので、2009年の定額給付金も貰えませんでした。

振りかえられて、日本の社会は杉山さんに優しかったと言えるでしょうか。

杉山●私が子どもを4人連れて、フィリピンにいたら死んでいました。やっぱり日本は支援の点で違います。学校でも、私にも、病院でも、ぜんぶ支援がある。生活保護などもある。それには、ほんとうに心から感謝しています。

母子寮に入り、3か月後に離婚できました。そのあと、疲れや生活の変化からか、パニック障害になりました。いきなり脈がドキドキしたり、泣いたり、なにもできなくなった。なぜなのか自分でもわかりませんでした。

その治療はずっと無料でした。私が安定するまで生活保護が受給できました。日本の支援がよかったのは、自分だけでなく、学校などでも子どもたちに支援する制度があることです。

DVによるPTSD（外傷後ストレス障害）ですね。それを克服し、社会復帰するまで支援があったのですね。

杉山●最初は近くの喫茶店でアルバイ

トしましたが、子どもを育てながらではちょっときつい環境でした。

落ち着いたのは、いまのバザールカフェ*3に入ってからかな。ここがいちばんわかってくれます。たまたまフィリピン料理の調理員の募集があり、勤めるようになりました。ここに来てから楽になりました。仕事もそうだし、APTにも近いし……。

離婚しても日本人の子どもを育てていれば、定住者ビザがとれるのですか。

杉山●私は、離婚するまえに永住権をもらいました。旦那さんは、とらせたくなかった。「とると、俺から逃げるだろう」と。でも、入国管理局から、「もう取得できるから、手続きをしなさい」と言ってくれたから申請できました。

日本語をもっと磨いて通訳として活躍する

杉山さんの、こんごの希望を教えてください。

杉山●もっと日本語を勉強したい。3年前からAPTでDV被害者を対象にしたボランティア通訳をしています。京都市教育委員会のボランティアにも登録して、学校でも通訳をしています。

DV被害者として、日本社会で暮らすフィリピン人に、なにができるか。いまの私がもっている能力はタガログ語だけ。勉強して、もっと日本語をうまく話せれば、書ければ、もっと……。外国人のお母さんたちは、日本語をわからないと学校のことがわからないのだから、自分の経験を生かして、だれかを助けられるかなと思います。

ほんとうは、4人めの子どもが高校に行きだせば、私も夜間高校に通うつもりでした。ところが、子どもが「いやだ」と言う。「私もママも高校では恥ずかしい」と言うので……。(笑)

あと2年して娘が卒業したら、いっしょに夜間高校に行こうと、タイ人の友人と相談しています。日本で生活するなら日本の高校の卒業証書をもらい、それでちゃんと仕事ができたらいいなと思っています。

毎日10分は、日本語を読めるように勉強しています。市民新聞とかがきたら、一所懸命、わかろうとしています。通訳していても、「もっとうまく通訳できればよかった」、そういうくやしさがあります。もっと日本語ができたら、もっと教えられる。

自分の経験がほかの被害者の痛みを少しでも和らげるなら

杉山●助けてもらったおかげで、私は救われました。こんどは、いま悩んでいる人にそれを返していきたいです。

みんな、DVのことを恥ずかしいと思っている。でも、私がみんなに自分の経験を話しているのは、ほかの被害者たちを少しでも助けたいから。DVは病気で言ったら、がん。最後まで、すごく怖い。自分が自分でなくなってしまう。それを被害者たちに、早く気づいてほしいのです。一度家を出ても、みんなまた戻ってしまう。そのくり返し。そういうのは疲れる。疲れるというか、自分の人生が前に進まない。

悩みを分かち合うコミュニティでありたい

杉山さんが所属されるPAG-ASAは、教会に集まるメンバーが中心の京都在住フィリピン人のコミュニティですね。

杉山●「希望」という意味です。会が出来たのは1985年です。教会のシスターや日本人のボランティアが支えてくれたそうです。初めはカトリック色が強かったのですが、現在はやや薄まっています。

日本にいるフィリピン人女性は、日本人と結婚された方が多いのですか。

杉山●女性はそう。男性は留学生が多いです。女性は、思春期の子どもを育てるのもたいへん。子育ての勉強会に行けば、思春期の子どもで悩んでいる外国人のお母さんがたくさんいます。

杉山さんの出身地、フィリピン中部のレイテ島

PAG-ASAメンバーのミーティングはなごやか

PAG-ASAの定例行事の「祈りの会」が終わったあとは、同じように高校生の子どもがいるフィリピン人のお母さんたちと子どもの問題や悩みを話し合います。PAG-ASAが、そういう思春期の子どもで悩んでいるお母さんたちが話し合う場になればと思います。

信仰と交流の場としての教会の重要性

カトリックの教会に通うという信仰が大きな力になっていますか。

杉山●そうですね。教会がいちばんの支えだったと思います。日本に来て、自分の居場所がなかったから。教会の場所がわかったときは、すごく嬉しかった。神さまも大事ですが、教会では友だちと触れ合ったり、お互いの悩みを話したりできるからです。そのころは日本語がわからなかったから、同じ言葉を話す人も探していました。自分が目覚めるというか、自分らしくあるためにです。

きょうも、これからお仕事ですね。

杉山●はい、もうここで7年働いています。金曜日はフィリピン料理です。きょうはフィリピンの伝統的な料理で、豚の挽肉が入ったソーセージです。

2011年10月21日(金)
バザールカフェ(京都市上京区烏丸今出川上ル岡松町)にて

＊1　京都府国際センター(京都駅ビル9階)
http://www.kpic.or.jp/
日本語教室のほか、外国人のための生活情報・相談窓口がある。

＊2　京都YWCA・APT
(Asian People Together)
http://kyoto.ywca.or.jp/program/multicultural/index.html
外国人が日本でクラスの中でぶつかる文化・制度の問題についての電話相談、学校での国際理解教育・人権教育などの出張授業、外国籍の親をもつ子どもの相談・支援を行なう。

＊3　バザールカフェ
http://bazaarcafekyoto.web.fc2.com/index.html
多文化共生とマイノリティへの支援を掲げカフェを運営。

インタビュー 03

京都インマヌエル宣教教会

2000年にクリスチャンの留学生が集まって設立。おもな活動は礼拝、聖書勉強会、食事会、大学入試勉強会、日本語勉強会。

メンバー……29人
構成……学生15人、社会人14人、男性12人／女性17人、
20代50%／30代30%／40代20%

話し手 尹 五仙(ユン・オソン、Oh-sun Yoon)さん
韓国光州市出身。大学院生

上京区、烏丸通りに面して建つ3階建ての建物。韓国人を中心とする留学生が集まる京都インマヌエル宣教教会です。礼拝室や食堂などの信徒のためのスペースが納まるビルの一室でインタビューに答えてくれたのは尹五仙さん。博士号取得のために、韓国から留学して立命館大学で学ぶ尹さんに、教会の活動とご自身の留学生活についてお話を聞きました。

尹五仙さん

来日されたのが2002年。どんなきっかけでしたか。

尹●当時、韓国でマンガやアニメーションがブームでした。日本のマンガを学ぼうと、夫婦二人で来日し、日本語学校に1年間通いました。その後、京都精華大学マンガ学部に入ったのですが、私は合わなくてやめました。卒業した夫はいま、韓国の中学・高校でアニメーションやマンガを教えています。

留学生活を全うできたのは教会のおかげ

尹●私は立命館大学の経営学コースに入り直しました。博士論文を書いて、いよいよゴールが見えてくるところまできています。いろいろ悩み、苦労はあったのですが、この教会があって私はここまでくることができた。それは自信をもって言えます。

日本に来てすぐに、教会に参加されたのですか。

尹●2011年の4月に日本に来て、教会にはじめて来たのは12月だったかな。教会には子どものころから通っていましたが、こことは違う宗派でした。

この教会の最初のメンバーは4人。韓国人の留学生が集まって教会を建てたのです。私に伝道したのもそのうちの一人、同じ京都精華大学の留学生でした。

食事に魅かれて留学生が集まる

尹●外国に来ていちばん苦労するのが食べ物ですから。初期のころは、信仰のもとに教会に集まるというより、ご飯を食べに来る留学生が多かったそうです。(笑)ここでは三食ご飯を無料で食べられるし、キムチもありますから。

私と同じように、だいたい学校で知り合った留学生を連れてきて、メンバーが増えました。

教会のグローバルなネットワーク

尹●教会の活動資金は献金で賄っています。毎回の礼拝での献金、それにアメリカや韓国からなど、多くの人から支援してもらっています。

ここの教会は長老派のなかでも宣教に力を入れている派です。教会のトップ、牧師さんはいつもはアメリカにおられます。毎週の礼拝では、アメリカで録音・録画されたビデオをここで聞いています。お話以外の、司会や賛美は東京にいらっしゃる宣教師さんがして、私はその下の執事という役割です。

1年に1回、世界各国から日本に宣教するためにアメリカ、ロシア、オーストラリアなどから人が集まる会があります。それが教会のいちばん大きな行事で、そうした際にも支援をいただいています。

日本人の建て前と本音にとまどった

京都の人とのつきあいはどうでしたか。

尹●最初はほんとうに傷つきました。(笑)日本人の友だちが、私の家にはよく来るのです。でも、自分の家には招待しない。私の価値観では考えられなかった。韓国で友だちのところに1、2回行ったら、自分の家にもかならず招待します。

何回も私のところに来て、キムチをいっぱい食べて、「次はうちにも来てね」とは言うのですが、じっさいには招待しない。それが何回かくり返され、やっと社交辞令だとわかりました。「京都人、日本人には本音と建て前がある」って。2年はかかりましたね。

日本や日本人の印象は変わりましたか。

尹●韓国では歴史的な問題や、竹島などのいろいろな問題があって、マスコミであまりよい印象では伝えられていません。学校の先生たちもそうですね。そんな環境でずっと育てられてきました。

日本に来て最初に「ああ、そうじゃない」と思ったのが、すごく親切なこと。それに、清潔で、時間にルーズでないなど、生活的にきちんとしているところがすごいと思いました。

日本での生活で身につけて、韓国に戻っても続けたいことはありますか。

尹●あいさつです。知らない人にもあいさつするのは、すごくいいなと思います。韓国で、たとえばエレベーターのなかで、あまり知らない人に声をかけるのはちょっと難しい。

ほかには、時間をきちんと守ること。

清潔さにも敏感になりました。京都で最初に驚いたのは、どこに行ってもトイレがきれいだったこと。

逆に慣れないことはありますか。

尹●最初は、銭湯でみんなが座っているのが理解できませんでした。韓国ではほとんど座らずにシャワーを浴びます。日本で最初に銭湯に行って、なぜ立ってシャワーができるところがないのかと思いました。あとでやっとわかったのですが、みんなに迷惑をかけないようにという……。だから、気を遣うところがちょっと疲れるんですよ。(笑)

直言されてもかまわない

日本では、「言わないけど、わかってほしい」というところがありますよね。

尹●留学生ですから、私に直接教えてほしいのですが、面と向かっては言ってくれない。日本人はそういう性格なのですね。とくに京都人は。(笑)それが疲れる面です。直接言ってくれればすぐに理解でき、次からは直せばいい。自分一人で悟るのには、時間がかかります。韓国人はすぐ、「こういうことはやめてほしい」と、直接言いますからね。でも、あまりにも直接的に言われて、傷つくこともあるのですが。(笑)

地域との交流の機会がもっとあれば

大学以外の、一般の地域の人とふれあう機会はなかったのですか。

尹●私は京都府の国際交流センターでキムチ教室の先生をしたことがあります。でも、10年間住みましたが、市民との交わりに留学生が参加することは、あまり簡単ではありませんね。お年寄りと話す機会は大家さんくらいです。

お祭りとか交流の機会があれば参加してみたいとは思います。この近くの上御霊神社の「さえずり市」には何回か参加したことがあります。

教会の近所の方から、最初は賛美歌がうるさいとの苦情もありました。教会がここに移って1年くらいは迷惑をかけました。そのあとは、なにかあったら近所の人においしい韓国料理を配ったり、海苔を配ったり、ちょっとした交流ももっています。

烏丸通に面した教会。鮮やかなステンドグラスが目印

信仰を持つ者が助け合う体制

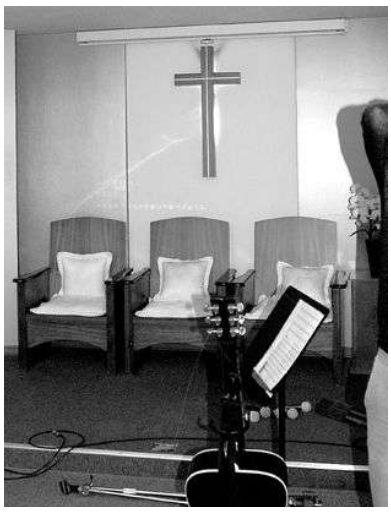
ここに集まるみなさんは、とても信仰が篤い方のようです。日本に来てさみしい外国の方が、なんとなく集まったりするわけですか。

尹●最初はご飯や情報のために来るのですが、「クリスチャンは、もういいわ」という人は、だんだん来なくなってしまいます。信仰心のある人が残るのですが、もともとはまったくキリスト教徒と関係のない人もいます。最初は食事のために来たとしても、ここでお話を聞いて信仰をもつようになる。それが私たちの目的ですので、経済的にはなんとかフォローしてあげようとしています。

最近の円高で困っている留学生は多いです。教会の近くには寮もあります。経済的にほんとうにたいへんな人には、寮に住んでもらっています。家賃は1〜2万円、さらに困っている人には無料で提供しています。

アメリカ人の牧師さんは、何語でお説教をされるのですか。

京都インマヌエル宣教教会のようす



尹●韓国系アメリカ人ですので、韓国語です。ここのメンバーは韓国人が中心ですが、日本人も3人います。ロシアやアメリカ、中国の方もいます。中国人でも朝鮮族が多いですね。去年までは、オーストラリア人がいました。

もっと日本人にも伝道したいですね。そのために教会を建てたので。最近は英語と韓国語、それに留学生のための日本語教室を設けて誘っています。月に一度の美容宣教もやっています。無料で髪をカットするのです。京大や立命館のミャンマー人が多く来てくれます。

メンバーが京都に残れないのが残念

学生が主体ということは、メンバーが入れ替わるのですね。

尹●就職活動をしても、京都では企業が少なくて、大阪での就職が多くなってしまいます。この10年間、私たちの教会から京都で就職した人はいないですね。ほとんどが大阪、東京、名古屋などです。この教会が好きで残りたい人もいるのですが、京都では就職が決まらない。

尹さんも大学院を修了されますね。

尹●私は、美容サービスのマネージメントを勉強してきました。韓国の大学で教職に就くことが一番の理想ですね。韓国では、総合大学や大学院に美容学科があるんですよ。

2歳の娘が、韓国の私の両親のもとにいます。子どもが生まれてからは月に1回、韓国に帰っています。京都で1か月間、勉強の生活をし、韓国に1週間くらい戻る。これまで3年、それをくり返してきました。博士論文のためだったとはいえ、やっぱり家族はいっしょに住まないと意味がない。これが私がこの2年間で悟ったことです。(笑)

尹さんの出身地、韓国の光州市

ネットワーク拡大が今後の課題

この教会の今後の課題や、こうなったらいいなという希望はありますか。

尹●もっと交流を広げたいですね。キムチ教室もしていたのですが、去年からなくなっています。私が今年帰ってしまうように、メンバーたちが帰ってしまうんです。いちばん多かった時期は60人くらいメンバーがいましたが、最近は日曜礼拝でも35〜40人までいかないかな。活動をもっとどんどん広げていきたいですね。

いま、みなさん夕食中ですね。

尹●毎日、10人から15人分くらい作ります。水曜日と日曜日の礼拝のときは40人分ちかくです。よかったら、ごいっしょにどうですか。親子丼みたいです。きょうは韓国料理じゃない。めずらしいですね。(笑)

2011年10月26日(水)
京都インマヌエル宣教教会(京都市上京区烏丸通寺之内上ル相国寺門前町)にて

みんなでいっしょに晩ごはん

インタビュー 04

シーヤンホン
夕陽紅の会

高齢化する中国帰国者一世への支援をきっかけに、二世とその支援者を中心に2011年4月に組織。きっかけは京都の大学が行なった、高齢の外国籍住民と外国の文化をもった人を対象とした生活調査だった。
http://xiyanghong.blog.fc2.com/

メンバー……15人
構成……学生1人／社会人14人、男性2人／女性13人、40代が中心

話し手
劉 偉(りゅう・い)さん　中国出身者。介護福祉士
劉 雪梅(りゅう・しゅうめい)さん　中国帰国者3世。小学校教員
芦田博美(あしだ・ひろみ)さん　中国帰国者2世。ホームヘルパー

第二次世界大戦の終戦時、中国大陸に取り残され帰国できなかった中国残留孤児と呼ばれる人たちがいます。1980年代後半から90年代にかけて日本への帰国がかないましたが、言葉や習慣の違いから、日本での生活にさまざまな困難が伴っています。
「夕陽紅（シーヤンホン）の会」は高齢化が進む一世への支援と、その家族である二世、三世を含めた中国帰国者が地域社会でよりよい生活を営むことをめざして組織されました。夕陽紅とは、夕陽が落ちてくる最後の輝きという意味です。「人生の最後をもう一度輝かしく彩ってもらうために」という意味が込められています。会のメンバーである中国帰国者二世、三世の3人に話を伺いました。

伏見区の醍醐・小栗栖地区で実施した、「小栗栖お年寄りアンケート調査」に加わった芦田博美さんは、二世のお一人です。

芦田●私は19年前、残留孤児であった母親の呼び寄せで日本に来ました。自立した生活のために母は精一杯やってきました。ただ、13年前に父が亡くなってから、体を壊してしまった。そんな母をなるべく理解してあげたいという気持ちで、参加しました。

ひきこもる残留孤児の母を理解したかった

芦田●70歳を超えた母は足が弱り、外に出かけるのを避けようとします。母は介護士さんからデイサービスの利用をすすめられたのですが、言葉ができないのでみんなから馬鹿にされているように感じます。それで行く気がなくなるのです。中国帰国者が集まる場もありません。家でじっとしているほうがましだと言って、毎日テレビを見るだけの生活をずっと続けています。

母は、小さいときから人の何倍も苦労を重ねてきました。他人に心を開く人ではないんです。しかも孤児の経験のある人だから、心を閉じてひきこもってしまう。「自分はなんでもだめだ」と考える。自信がないんです。

支援を受けるだけでなく本人の意識を変えたい

芦田●母のような人には、支援者に近づいてもらうより、本人の心を広げることのほうが大事だと思います。心が広くあるには、帰国者どうしの交流がやはり必要です。それが第一歩だと思います。インタビューでみんなの話を聞いて、自分の思いも話して、そのことに気づきました。

調査の結果、孤立化や言葉の問題が浮かび上がりました。帰国者に介護や健康について中国語で説明する必要があります。そのために調査の参加者が毎月開いたミーティングが夕陽紅の会につながりました。会が発足したのは2011年4月。その前から問題に気づかれた劉偉さんは、少しずつ活動を続けてこられました。

劉偉●中国から日本に来たとき、私はもう50歳を過ぎていました。日本語ができないので、はじめの5年間は掃除の仕事をしました。

帰国者が本心を語れる場が乏しい

劉偉●帰国者たちはふだん、本心を他人

劉偉さん

劉雪梅さん

芦田博美さん

に伝えることがあまりありません。日本に来て日本語ができず、周囲から差別されてとてもつらかった。そのつらい気持ちをだれに言えばいいでしょうか。家族に言えば心配されます。友だちに言えば笑われるかもしれません。日本に住み、仕事をして、帰国者のみなさんと接するうちに、そんな心の傷が互いに理解できるようになりました。

帰国者どうしと支援者との交流の場が重要であると感じられ、それが夕陽紅へとつながる第一歩だったのですね。

劉偉●日本に来てから小栗栖日本語教室*1にも参加しました。一世の方たちといっしょに勉強しましたが、そのときはみなさん楽しそうで、勉強も熱心です。ふだんとは違います。

教室には、帰国者やボランティアさん、帰国者たちの事情をよく理解してくださる日本語の先生方がいます。みんな、ほんとうに小栗栖日本語教室を楽しみにして、交流していました。そういう日本語教室があってほんとうによかったと思います。

既存の福祉サービスでは充分な介護はむずかしい

劉偉●掃除の仕事は5年間しました。でも、55歳を過ぎると、体力や言葉などのいろいろな困難があった。そんなとき、支援者の方からヘルパーの仕事を勧められたのです。ヘルパー2級の勉強から始めました。

多くの帰国者が日本できびしい老後の生活を送ることを強いられています。介護保険や介護サービスなど、具体的な生活援助や身体介護ができたとしても、心のケアはむずかしい。

帰国者たちの生まれた環境や生活背景、社会背景は、日本のみなさんとはいろんな点で少し違います。各家庭の事情もある。食生活や生活習慣も違います。介護にしても、やはり中国語を使わないと、サービスを上手に提供できないと思います。

私は帰国者の老後生活の現実を深く考えるようになり、帰国者たちのためになにかしたいと感じていました。

病院においてさえ、孤立する帰国者

劉偉●ヘルパーの仕事をとおして、何人もの帰国者にサービスを提供しました。そうするなかで、思いもしなかった問題を知ることにもなり、ほんとうにむずかしさを感じています。

ある一人暮らしの帰国者の利用者さんが、急に入院することになりました。私が病室に行くと、その人はほんとうに困っていました。日本語で毎日の注文ができず、ごはんが食べられません。身内の人もだれも来られず、同室の人からも誤解され、孤立していました。

ある日曜日、病院に行ってびっくりしました。停電でまっくらです。私は急いで病室に行きました。その方は一人でおびえていました。だれも助けてくれなかったのです。停電で、ほかのみなさんは明るいところに行きました。しかし、この人にはだれも教えてくれませんでした。いえ、きっとだれかが言ったのでしょうが、日本語ではわかりません。どういう状況か、どこに行けばよいのか、まったくその人にはわからなかったのです。

その晩、考えました。このような帰国者には、私たち夕陽紅のようなボランティアがぜったいに必要です。通常の介護サービスでは足りない部分も、私たちなら補えると確信しました。

制度が周知されていない現状

劉偉●その方が退院された後、遠くに暮らす娘さんに、「病院に入れるなら、なぜショートステイを利用しないのですか」と聞きました。すると、「そんな場所

敬老の日にお孫さんから一世のみなさんへプレゼント

があるのですか」と聞き返されました。その娘さんはショートステイに行かせたくなかったのではなく、知らなかったのです。

調査を通じて、さらにたくさんの帰国者の声を聞くことができたのですね。

劉偉●つらい思いをしている帰国者たちに、夕陽紅がいろいろな情報を提供したり、アドバイスしたりすることがぜったいに必要です。ネットワークがあって、たくさんの人の支援があることを理解してもらえば、一人で悩む状況も減るはず。家族にはほんとうのことが言えなくても、ボランティアの支援者になら言えるかもしれません。

一世の介護には二世、三世の力が不可欠

劉偉●調査の結果、ショートステイやデイサービスを利用したい人は多かった。でも、中国語を話せるヘルパーさんはほとんどいない。私が考えているのは、これから二世、三世の若いヘルパーさんたちを育てる仕事です。

劉偉さんは、説明会で二世や三世の人たちにヘルパーの仕事がどういうものかを紹介されていますね。

劉偉●私が4年間ヘルパーの仕事をした経験、とくに帰国者にサービスを提供するうちに感じたことがたくさんあります。それを伝えて、できるだけ早く、たくさんの帰国者二世、三世のヘルパーさんを育てることができるように、がんばりたいです。

帰国者だけでなく地域全体での介護システム

劉雪梅●夕陽紅といえば中国帰国者のための介護施設をつくる会だと考えられがちです。でも、それは到達点ではないでしょう。

帰国者二世である私の母は、いま夜間学校に通っています。学校には帰国者一世、二世がたくさんいて、あまりにも帰国者が多いので、日本語を勉強したいのに中国語を話すことになってしまう。「この2年間の自分の伸びはない、早くここを卒業して高校に行きたい」と言っています。母のような人にとっては、中国帰国者しかいない介護施設はかえって不適切だと思います。

夕陽紅は帰国者一世を対象にスタートしましたが、二世、三世のことも考えなくてはいけません。それに、地域も含めた幅広い分野での相互理解と介護を考える必要もありますね。

劉偉●私も中学、高校に出向くなどして帰国者たちのニーズを日本のみなさんにも伝える活動をしています。

介護予防がもう一つの柱

劉偉●夕陽紅のもう一つの重要な活動は、介護予防です。要介護にならないように、健康状態を保ってもらうための健康教室を開こうと話し合っています。夕陽紅が手助けしますので、みなさんが介護予防の重要性を理解して、対策をはじめてもらえれば、なによりです。寝たきりになれば、ほんとうにたいへんですから。

私は今年の3月に介護福祉士の資格に合格しました。さまざまな方から支援いただいたおかげです。

芦田●私はヘルパー2級の資格をとって、現場に入ってまだ1か月です。勉強することがいっぱいあるんだなと感じています。これから一生、学ぶ気持ちで生きようと思います。劉偉さんに死ぬまでついていこうと。(笑)

次の世代の育成が双方にとって大事だということですが、劉雪梅さんは中国帰国者三世ですね。

劉雪梅●はい、いまは小学校教員をしています。

京都市では、外国につながる子どものための日本語教室が設置されている学校が、小中あわせて13校あります。日本語を母語としない子どもたちが対象です。なかでも小栗栖は、日本語教室が設置されている学校がとても多い地域です。私はそのなかの一つの小学校で、おもに中国帰国者三、四世の子どもたちに日本語を教えています。

そのほか、子どもたちやその親御さんの支援、通訳や翻訳などが私のおもな仕事になっています。

中国につながるルーツの大切さを教えたい

劉雪梅●一世である祖母は、私が中学のときに亡くなりました。大きくなってからどうして自分は日本で生活しているのかと考えたときに、祖母のたどった歴史がとても大事であることに気づきました。祖母から聞くことは、もうできません。少しでも祖母とつながれればと思い、調査に参加しました。

一世につながる自分をどのようにとらえるかは重要な問題です。子どもたちは中国につながる自分をどうしてもマイナスにとらえてしまいがちです。日本の学校、社会で、生きていくには、自身のルーツ、中国につながっている自分というアイデンティティを、気をつけて育まないといけません。

私はいま、小学校で日本語を教えるだけでなく、中国帰国者の話を伝えようと考えています。学校に勤めて5年めですが、今年から教え始めようとしているところです。もちろん、かんたんには伝えられません。ほかの学校でそうした取り組みがあったので、絵本や紙芝居などの教材をまるごと借りて進めるつもりです。

いまの私では、「日本の歴史のここに位置づけられていて、戦争とも深い関係がある。いまのあなたは、ここにつながっているんだよ」ということを伝えるだけで精一杯です。生きるうえでプラスのエネルギーになる段階までは、まだまだ達成できていないでしょう。でも、なにも知らないで卒業するよりはいいと考えています。

中国はほんとうに大きいので、まずは中国につながる自分を誇れる点を、いろいろなところから増やしていきたいと考えています。たとえば、身近な食べ物、「餃子はすごくおいしい」などからでもいいのではないでしょうか。

中国につながる部分は自分の一部ですが、そのことが自分自身に与える影響は小さくありません。ですから、そこがうまく育たないとしんどい。そこがうまく育っていれば、社会に対してどうつきあうか、あるていどはバランスがとれます。そこではじめて、自分の父母、祖父母が生きた歴史はどんなものだったのか、父母や祖父母はそのときなにを考えていたのかに考えが及ぶようになります。

語られない一世の思いは次世代に伝わらない

劉雪梅●一世が困っているいまの状況は、本人に話を聞かないとわかりません。私も、「苦労しただろうな」と漠然と感じるだけ。具体的な話を聞いてはじめて、「ほんとうにつらいんだな」と思えるのではないでしょうか。身内だと、「また言っているわ、どうしようもないな。元気出して」となるのかもしれませんが。(笑)

調査でも、世代間の隔絶が問題になっていますね。

劉偉●私は介護の仕事で接しているので、帰国者一世が自分の家族とどのくらい会話できているか、よくわかっています。二世、三世に伝えることはほんとうに重要です。そうはいっても、人生のほとんどを日本で生活してきた二世、三世は、一世の考え方どころか生活習慣すらあまり理解できません。

たとえば、一世たちはものを大切にします。これが理解されにくい。お金はあるのに、なぜそんな古いものを使いつづけるのか。これは個人の習慣や意志の問題ですね。でも、「それはいらないものだ」、「汚いから」と勝手に捨てられてしまいます。一世たちは捨てられても、ほとんど黙っています。あとでゴミ箱から拾って、使い続けます。

もう一つ、廃品を拾うこと。一世のなかには、廃品を拾ってくる人もいますが、それが家族たちには、まったく理解できません。多くはないがお金はあり、生活できているのに、なぜそんなことをするのか。それにはいろいろ理由があります。

理由の一つは、日本語ができないからです。日本に来てからは、生活は自分の家庭の中だけです。日本はどんな国なのか、ほかの人がどのように生活しているか知りません。日本人の家に行ったことは、ほとんどないのです。だから、日本人の使った道具や物を拾って研究します。なにに使うのか、なぜこの形なのか。そこから日本の生活を理解しようとするのです。それを互いに伝えあいます。勉強のための一つの習慣です。それが、二世三世には理解できません。

劉雪梅●私の父は二世ですが、拾ってきます。私も理解できなかったのですが、そういうことなのですね。

バラバラだった帰国者が一つにまとまる場

帰国者とひとまとめにされますが、世代間で生きてきた時代も、育った生活環境も違いますね。そういうバラバラな帰国者を一つにできる集まりや居場所づくりをめざされているのですね。

劉偉●二世、三世たちは、「自分は帰国者の子だ」ということにマイナス面を感じがちです。しかし私の希望は、二世、三世であることをポジティブに生かすことで、中国の文化と日本の文化とがうまく融合することです。

一世たちは、これまで子どものための人生を送ってきました。中国の生活、日本での当初の生活はよくなかった。それがようやく支援を受けたり、一世のことを理解する人が多くなったりして、少し安定してきたところです。

次世代の理解を得て一世たちに安息の老後を

劉偉●一世たちはもう70歳代以上です。残りの人生は長くありません。やっと日本に来て安定して年金をもらって、これからは自分のための生活ができます。二世、三世の理解を得て、自分の意志で自分なりの老後の生活を送ってほしいのです。それには、二世、三世の理解は欠かせません。それがなければ、悲しい人生になります。

大きな目標かもしれません。しかし、できると思います。みなさんの努力が必要です。帰国者自身の努力と、周りのみなさんの努力の両方が必要です。

2011年11月13日(日)　京都市醍醐交流会館(京都市伏見区醍醐高畑町)にて

＊1　「日中文化交流をすすめ、中国帰国者を支援する会」によるボランティア日本語教室。
http://www.nichukyoto.gr.jp/sien/

伝統的な衣装で、「橄欖樹」の歌を披露するメンバーのみなさん

インタビュー 05

外国人女性の会パルヨン

2007年に外国人女性を支援したい外国人・日本人女性が集まり設立。
外国人の女性、とくにお母さんが直面する問題に支援活動を行なう。
http://blog.goo.ne.jp/paruyon

メンバー……女性のみ80人
構成……学生10人／社会人70人。うち、日本人メンバーは30人程度。
約80%が家族連れ

話し手 早崎ニーナさん
フィンランド、ヘルシンキ出身。翻訳家、大学院生

日本で暮らす外国人、とりわけ外国人女性がかかえる特有の問題があります。たとえば、日本人の夫と離婚した時、生活のための情報がとたんに手に入らなくなってしまうケース。そうした問題の解決に取り組んできたのが、外国人女性の会「パルヨン」です。会の代表でフィンランド出身の早崎ニーナさんに、自身の経験を交え、会の活動について話していただきました。

早崎ニーナさん

外国人女性の問題は自分たちで解決する

ニーナさんたちがパルヨンを設立されたのは2007年ですね。どういう思いで始められたのですか。

ニーナ●京都市外国籍市民施策懇話会(現・京都市多文化施策懇話会)の委員だったのです。外国人女性にはこういう支援が必要だと働きかける会だったのですが、京都市はなかなか動いてくれない。予算がない、人材がない、いろいろな問題があるという話になった。そこで、「では、自分たちでやるしかない」と思ったのです。

パルヨンとはフィンランド語で「たくさん」という意味です。たくさんの友だちができて、たくさんの情報をもらって、たくさん楽しい時間を過ごせるような団体にしたい。だから、この名前を選びました。外国人団体であれば、ふつう英語の名前にするでしょう。でも、それだと英語で話す団体だと思われそうで嫌でした。フィンランド語はだれも知りませんから。

日本人の配偶者がおもなメンバー

ニーナ●メンバーの多くは日本人と国際結婚した人たちです。それに、留学生や離婚した外国籍女性、それに日本人ボランティア。男性もイベントによっては参加できますので、受け入れないということではありません。

メールによる支援活動や外国人女性の交流会を開催されていますが、交流会ではどんなことを……。

ニーナ●だいたい2か月に1回、外国人女性が関心をもっているテーマを選び、それについて話せる講師からレクチャーを受けます。たとえば離婚問題だったら弁護士をお呼びして、そのあとみんなでディスカッション。それが交流会です。ただ、私が博士論文の執筆で忙しく、最近はできていません*。

京都市国際交流会館や京都府国際センターで、大きなセミナーを年に2回やったこともあります。大学の先生を呼んで、異文化間コミュニケーションとか離婚問題、国際結婚がうまくいく秘訣とか、そういうテーマでした。

情報を得る機会が限られている外国人女性

ニーナ●まえは、漢字教室もやっていました。外国人女性にとって問題になるのは、やはり日本語の読み書きです。長いこと日本で暮らし、日常会話は上手でも、読み書きができない人が多い。そうすると、いつも日本人の夫に頼らざるをえない。夫婦仲がうまくいっているうちはいいのですが、万が一のこと、たとえばご主人が亡くなったらたいへんです。子どもたちが側にいればいいのですが、だいたいみんな東京で就職してしまう。

そんな専業主婦の外国人女性には、情報が入ってこない。ネットの検索も英語に頼ってしまうから、人生や生活、活動の幅がとても狭いです。だから、日本語の読み書きはぜったいきちんとできたほうがいい。でも、差し迫ったきっかけがないと、学習を始めるのはなかなか難しいようです。

メールによる支援活動には、どういった相談が寄せられますか。

ニーナ●たとえば、「ビザの申請がうまくいかない」、あるいは「夫が失業して鬱病になってしまった」、「心理カウンセリングを英語で受けたい」、そういう相談ですね。電話でもやっていましたが、最近はメールが中心です。細かいアドバイスができるわけではないけれど、心の支えになれることがある。

パルヨンで使われる言語はおもに英語ですか。

ニーナ●いいえ、欧米出身者でも、ロシア人女性などは英語があまりできないし、東アジアや東南アジア出身者がどちらかといえば多い。だから、みんなの共通言語は日本語です。

とはいえ、日本語があまりできない人には通訳をつけないといけない。でも、ボランティアがなかなかいません。ある程度の日常会話はできても、離婚問題などで法律の専門の話になると充分ではない。とくに中国語ですね。英語はしかたがなく私がやっています。

日本人の積極的な参加を期待します

80人ほどのメンバーのうち、日本人はどのくらいですか。

ニーナ●30人くらい。日本人のボランティアは、たとえば「ここで受付をお願

いします」と言えばやってくれる。それはとてもありがたいのだけれど、自ら積極的に動いて、責任者になるような人がもっと出てほしい。たとえば、広報をする人、それに、申請書や報告書を書く人とか。

活動のスペース確保が大きな問題

運営資金は交流会のたびに参加者が負担して、講師代や場所代に当てているのですね。

ニーナ●ちゃんとした拠点があればいちばんいい。でも、とてもお金がかかります。交流会の参加費が500円ほどで、あとはコア・メンバーが少しだす程度では、とてもできるわけがない。

こういう団体が、無料でずっと借りられる場所があればいいと思います。閉校になった小学校には、空いている教室があるらしいですね。そういうところでもよいのですが。

日本で15年間生活したニーナさんが、これはやめてほしいということはありますか。

ニーナ●とにかく、肌の色が違う人を見たら逃げるのではなくて、接しようと努力してほしい。それに、白人だから英語をしゃべらないといけないという先入観はやめてほしい。

外国人なら英語はペラペラ?

ニーナ●私はいま、兵庫県の「子ども多文化共生サポーター」として、小学校に通っているフィンランド人の子どもたちの学習支援をしています。

ちょうど来年、学校に上がるフィンランド人の男の子がいます。フィンランド人は金髪なので、日本人にとってはいかにも外国人といった子ですよ。日本人の子どもたちは、その男の子に「ハロー、ハロー」と言って英語でしゃべろうとするのね。だけど、フィンランド人の5歳の子どもに英語ができるわけはないでしょう。(笑)

私が説明したのは、「この子は英語がまだできないけれど、フィンランド語はできる。これから日本語をがんばって勉強するので、友だちになってください」と。日本の子どもたちが外国語といえば英語しか存在しないと思っているのはなぜかと思う。日本人には、そういう先入観はありますね。

ニーナさんご自身も、日本では外見上のことで、困ったことはあったのでしょうね。

ニーナ●悪いことばかりじゃないよ。場合によっては有利にもなるし、それを利用してできた仕事もありますから、いろいろです。

外国人のキャリアを日本は生かし切れていない

ニーナ●私は、日本に来て語学学校の講師をしていました。でも、なぜ日本での私は語学関係の仕事しかできないのか、すごく腹が立った。教師の仕事を続けるために大学で英語の教育法をきちんと勉強するか、教師を辞めるかという選択に迫られたことがありました。私は英会話を教えることを仕事にしたくない、そんな一生にしたくないと思ったので辞めました。

友だちもみんな語学教師ばかりで、そのことにとても疑問があった。そこで、なぜこんな現状なのかを知りたくて、仕事を辞めました。いま私は、大学で労働社会学を勉強しています。博士論文のテーマは「高学歴外国人の日本におけるキャリア形成」です。そういう問題を扱っています。

この研究をしているうちに、日本人もたいへんだということもわかりました。(笑)とくに日本人の女性は、外国人と似た立場ですね。

いつまでたっても外国人はお客さま

ニーナ●私が論文のためにインタビューしている対象に、母国で弁護士やビジネス・コンサルタントをしていた人がいます。それでも、日本に来ると大学で語学関係の講師に就くことができればよいほうです。つまり、人の才能やそれまでのキャリアは、日本ではまったく無駄になるのですね。

外国人のそれぞれのキャリアを活かしきれていないというのは、日本という国にとっても大きな損失ですね。

ニーナ●言葉の問題はたしかにあります。でも、母語レベルのように完璧でないと、日本語ができると思ってもらえないというのはどうでしょうか。

日本人は、外国人をその社会の一員とみなさない。いつかは国に帰るのではないかという、お客さん意識がある。お客さんであるうちは、生け花や茶道を紹介したり……。そんな紹介だけでは、あまり意味がない。ふだんいっしょに生活する人間どうしと見られないことに、ちょっと困っています。まだ外国人の数が少ないという理由もあるのかもしれないのですが。

もちろん、いいところも日本にはあります。治安がとてもいいし、みんな基本的には親切だと思います。日本の文化は思いやりの文化でもあるのだから、悪いことばかりではないよ。

ニーナさんはフィンランドの大学で2年間、日本語を勉強され、留学生として日本に来られたのですね。ヘルシンキには何歳までおられたのですか。

ニーナ●20歳くらいかな。そのあとは戻ったりもしたけれど、1年を通じて日本にいることはなかった。世界各地を旅して、旅先で住み込んで仕事をして、お金が貯まるとまた移動した。

大学を出てから東京で日本の企業に就職しました。そこで2年間働き、日本人の夫と知り合って結婚して、関西に移ったんです。結婚したから定着したんだろうな。そうでなければ、たぶん日本にいつかなかったと思う。(笑)

フィンランドと日本の言語事情

ニーナさんは、日本でフィンランド語と英語を教えられていたのですね。

ニーナ●フィンランドは、大学の教科書がフィンランド語ではない。人口が少なく売れないので、出版されない。だから、英語で読むしかない。国としてやっていくには、目を外に向けないといけないわけです。

日本はいろいろな会社がたくさんの工場や研究所を海外にもっていますね。だけど、海外に行くのは一部の人だけ。ふつうの日本人は行く必要はないでしょう。人口が多いから、外国語を勉強する必要がないわけですね。

ご近所の方とのお付き合いはどうですか。

ニーナ●それがあまりないのです。おばあちゃんたちが話をしているのを聞いたことがあるのですが、すごく不安を感じるみたい。外国語が聞こえること自体に不安を感じるようです。

別のおばあちゃんは、1年たってやっとあいさつしてくれるようになった。でも、英語でしゃべらないといけないと心配している。これは年齢の問題もあるよね。多くの人たちはみんなきちんとあいさつしてくれるので、そんなに問題はないけれど。

でも、マクドナルドに行って私が日本語で注文しても、応対は英語に切り替える人がいるんですよね。あれはなんだろう。私が日本語を話せて理解できることを、なぜわかってくれないのだろう。自分が外国語をマスターすれば、感覚はわかるはずなのですが。

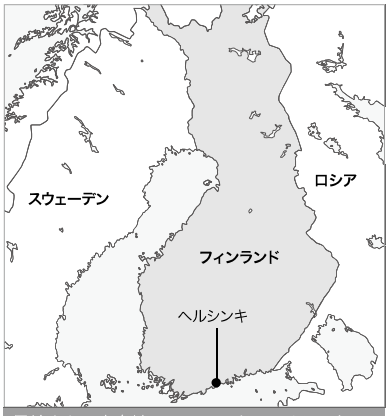
日本人も外国人も同じ人間です

最後に締めのメッセージをお願いします。

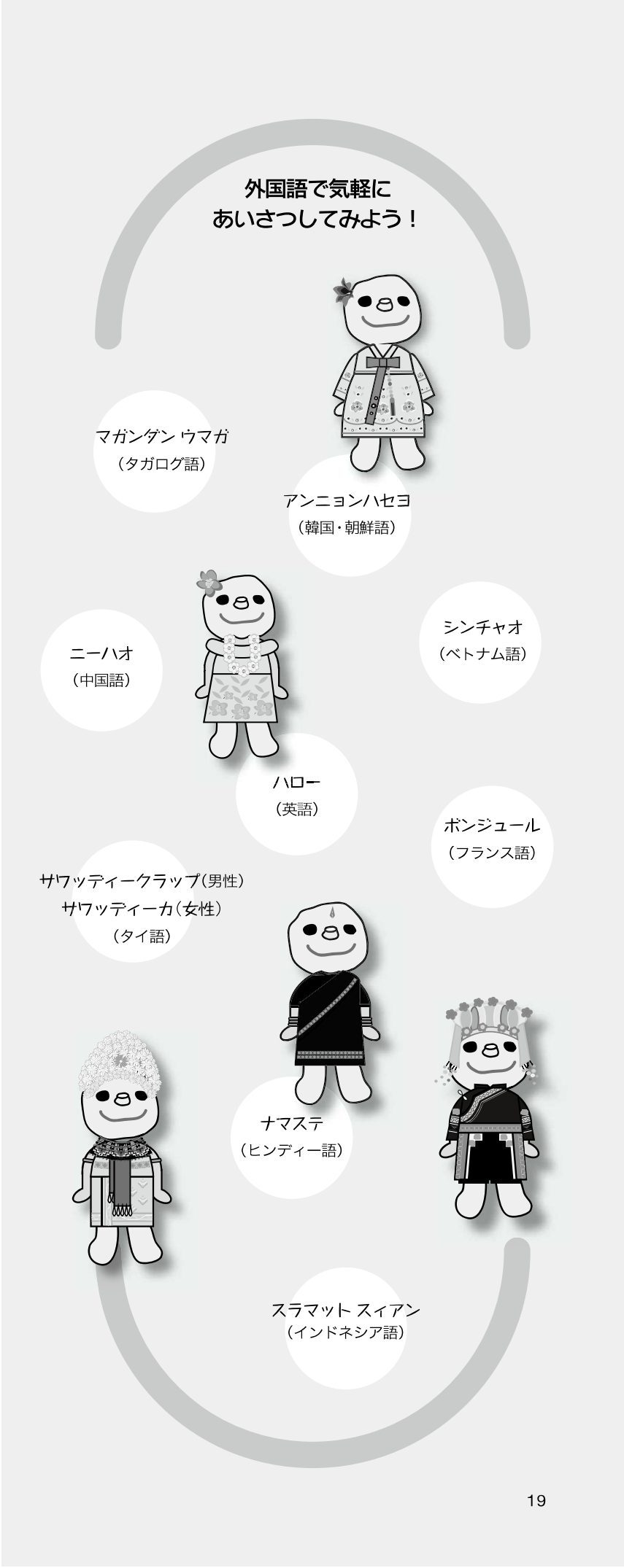
ニーナ●日本に来る外国人は、これからもぜったいに増えると思う。外国人は日本人と同じようにふつうに暮らしているし、ふつうに仕事をして、子育てをしている。だから、外国人であるから違うというのではなくて――たしかに違いもあるのだけれど、結局は人間はみんないっしょなんだ。そんなメッセージが伝わればいいなと思います。

2011年12月8日(木)
京都YWCA（京都市上京区室町出水上ル近衛町）にて

＊最近の活動については会のホームページ
http://blog.goo.ne.jp/paruyon
をご覧ください。



早崎さんの出身地、フィンランドのヘルシンキ



インタビュー 06

インドネシア人女性コミュニティ
An-nisa shalihah（アニシャ シャリハ）

2005年にスタートしたインドネシア人女性の会。
30代を中心とするメンバーによる親睦と情報交換の場。

メンバー……在京都インドネシア人女性　約50人
構成……学生20人／社会人30人。約80%が30代、20代と40代が20%

話し手
左から
ロクマ(Rokhmah)さん
西ジャワ、バンドン出身、2007年来日
ユニ(Yuni)さん
西ジャワ、バンドン出身、2008年来日
ワヒタ(Wahidah)さん
中部ジャワ、ジョグジャカルタ出身、2010年来日
ウィンディ(Windy)さん
バリ島に近いジャワ島の東端部のバニュワンギ出身、2009年来日
通訳:エニ・レスタリ(Eni Lestari)さん

東南アジア、赤道をまたぐように散らばる島々からなるインドネシアの人口は約2億4,000万。世界第4位の規模を誇ります。言語、宗教も多様な人たちが暮らすこの国から来て、京都に暮らす人はおよそ270人。今回、お話を伺ったのはインドネシア人女性の4人。留学生として龍谷大学で学ぶユニさん、留学生の夫と子どもとともに日本にやってきたロクマさん、ワヒタさん、ウィンディさんに京都での生活について話を聞きました。京都に来て日の浅いロクマさん、ワヒタさん、ウィンディさんの話の通訳は、京都で15年以上暮らすエニ・レスタリさんが務めてくださいました。

左からロクマさん、ユニさん、ワヒタさん、ウィンディさん

この女性の会は、いつ始まり、どんな人が集まり、どんな活動をされていますか。

ロクマ●会ができたのは2005年です。参加者は現在、50人ほどです。

コーランと日本語をみんなで学ぶ

ユニ●いろんな活動があります。みんなが月に2回集まってのコーランの勉強・朗読会を行います。コーランの朗読会は、インターネット電話のスカイプを利用して、週1回しています。

ロクマ●オンラインでは、日本語の勉強会もしています。コーランと日本語、それぞれ毎週1回です。

ユニ●日本語を教えているのは、私です。2008年から留学し、龍谷大学で日本語を学んでいます。大学ではいつも日本語で話しているので、インドネシア語を話せるこの会は、私のストレス解消の場の一つですね。

みなさんが顔を合わせるのは、月に2回ですね。

ロクマ●はい。最初にコーランを読み、そのあといろいろなテーマでディスカッションと情報交換をします。テーマになるのは、たとえばイスラムに関することや日本での教育について。みなさん、子どもを日本の学校に通わせているので、どんな問題があるのか話し合います。また、悪いメディアから子どもたちをどうやって守るかも話題になります。メンバーには留学生もいるので、論文の発表もあります。

この会ではインドネシア人の友だちと会うことができるし、新しい友だちを作ることもできます。日本の生活や文化について話し合うことも、イスラムの勉強もできます。

多民族、多宗教のインドネシア人が一堂に会する場

今日はおいしい料理をいただきましたが、いつもこうなのですか。

ウィンディ●コーランの朗読会のときは、インドネシア料理をみんながもって集まります。今日もロンボク料理、ジャワ料理など、インドネシアのいろいろな地方の料理がありました。その日、忙しくない人が作ります。

ワヒタ●私はあまり料理が上手ではありませんが、レシピの交換もします。

宗教に関しては、インドネシアで勉強できなかったこともこの会でいろいろ学ぶことができています。そうした勉強の成果を毎回、順番に発表しています。テーマを決めるのは発表者本人です。この会に入って、自分は一人ではないという気持ちになれたことがよかったですね。

ウィンディ●私は、みなさんと同じように、友だちに会えるのがいちばんです。インドネシアは広いので、最北西サバンから東端のニューギニア島メラウケまでいろいろな民族がいます。アメリカの西海岸から東海岸までと、ほぼ同じ距離です。

エニ●ここにいる私たちも、じつはそれぞれ民族が違うんですよ。

ウィンディ●日本にいるあいだに、こんなにいろんな人たちと知り合えます。インドネシアに帰れば、こんなチャンスはありません。

普段の生活でも喜び悲しみを分かち合う

ウィンディ●今日のように集会所を借りるのは大きなイベントの時だけで、ふだんはメンバーの家で集まります。仕事の都合や日によって参加できない人もいますから、毎回だいたい25人くらいが集まります。

ユニ●でも、私の家に50人集まったことがありました。私の誕生日で、たいへんだったけど嬉しかった。みんながたくさんの料理をもって集まり、コー

ランを読んだり、誕生日の歌を歌ったりして楽しみました。
エニ●赤ちゃんが生まれた時にも集まって、お祝いのお祈りをします。亡くなった人が出た時も、みんながお祈りをしてくれます。そういう時にはいちばん、心強い。
ウィンディ●困難な時に、みんなに気楽に話すことができます。
ユニ●私はインドネシアにいる息子のことが懐かしくなった時は、みなさんのお子さんをだっこしたり、遊んだりしています。

団地の集会所に持ち寄った料理で、みんなで昼ご飯

メンバーが顔を合わす さまざまな機会を用意

女性の会ということですが、今日は男性もたくさんおられましたね。

ユニ●今日はインドネシア人留学生の会の集まりがいっしょでした。私たちのコーランの勉強会を、それにあわせたのです。
エニ●奥さんも子どもたちもいっしょに参加する家族の会もあります。メンバーは重なりますが、グループごとにメールやフェイスブックなどの連絡のツールをもっています。
　メンバーは京都、滋賀から集まります。積極的に参加される人とは、みな顔見知りです。
ウィンディ●キリスト教徒の団体もあります。インドネシアで信仰されているのはイスラムだけではありません。
ユニ●今日の留学生の会には、イスラム教徒もキリスト教徒もヒンドゥー教徒も集まります。宗教は関係ありません。留学生はだいたい3年か4年の滞在です。長くて5、6年。メンバーは替わりますが、会はずっと続いています。
　エニさんのように、日本人と結婚している人はずっといますね。(笑)
エニ●そう、今日はいませんが、日本人の夫もいっしょに会に参加します。

子育てのために日本語と格闘

エニさんは元留学生ですが、他の方は、留学生の配偶者として日本に来られました。普段はどのような生活を送られていますか。

ロクマ●子どもが4人いるので、なかなか忙しいです。日本に来てからも、2人生まれました。日本語を勉強したいけれど、子どもを連れて行ける学校がない。だからいま、オンラインで勉強しています。オンラインでは、日本各地のインドネシア人女性のコミュニティと日本語や教育、宗教など、いろいろな情報を交換しています。
　子どもたちが通う日本の学校のことは、やはり大きな話題になります。それぞれの都市で事情が違いますから。
　子どもが通う学校で使われている日本語は、最初は難しかった。でも、慣れてきました。個人懇談のときには特別に英語の通訳がつくサービスがあります。学校からの手紙には、いまはひらがなでふりがながついています。
ワヒタ●私の子どもは、まだ幼稚園児です。幼稚園からの手紙は、同じ幼稚園の日本人のお母さんでインドネシア語が少しできる友だちがいるので、翻訳してもらっています。おかげで、私の日本語があまり上達しません。(笑)彼女がいない時は、夫が大学の研究室で英語に訳してもらいます。
ウィンディ●私の子どもはまだ3歳です。私が専業主婦ですので、保育園には入れていません。ウェブサイトで知った幼児教室に、木曜日と金曜日に子どもを連れて参加しています。それ以外は児童館で遊びます。
　月に1回は出町柳で、アメリカ人と国際結婚した家族を中心にした集まりがあって、英語で遊んでいます。

インドネシアでの習慣に従って、テーブルをはさんで男性、女性がわかれて座る

インドネシアの生活様式を 日本で営む不便

日本の生活で困ること、楽しいことを教えてください。

ウィンディ●日本にはイスラムの教会・モスクがありません。それが困ります。アザーンといって1日5回、お祈りの前に

モスクから流れる呼びかけを聞くと心が癒されます。日本人には音楽に聞こえるでしょうが、「お祈りしましょう」という呼びかけです。

それに気候です。インドネシアには冬がないので、私たちにとって日本の冬はとても厳しい。日本の夏も暑くてたいへんです。

日本でインドネシア料理を作るのが難しいことも困ります。材料の値段が高く、限られた場所でしか買えません。京都ではイスラム文化センター*1で買います。あるいは、オンラインで購入額が1万円を越えると送料が無料になるところから買うなどしています。

ワヒタ●イスラム法に則った食材のハラール*2を探すのが、日本ではなかなか難しい。スーパーでおやつを買う時も、原材料に書いてあるショートニングが植物性か動物性かで、迷います。豚肉はエキスでも、脂でもいけません。

ウィンディ●楽しい点は、日本には四季があり、きれいなことです。インドネシアにないものが日本にはたくさんあります。とくに新幹線はいいですね。交通機関はとても便利です。乗り換えをするにも、いろいろな情報があります。だから、日本語がわからなくても、迷子になりません。

医療情報をメンバーで共有

日本語がわからないと、病院ではたいへんではないですか。

ロクマ●「ここのお医者さんは英語を話せる」、「どの病院に英語のできるお医者さんが多い」といった情報がこの会にはあります。私は日本語が少しはできるので、できる限りの日本語でコミュニケーションをとっています。

ユニ●緊急の時は、私や通訳のできる仲間のだれかがついて行きます。

二つの国で何回も入院している経験からすると、日本のほうが医療サービスはいいですね。インドネシアでは、医療保険はあっても社会階級によって受けられる医療サービスが異なります。

壁になるのは言葉だけ？

ユニ●問題になるのは、日本人との人間関係です。壁を壊すのに時間がかかります。インドネシア人は、つきあいやすい。初めてあった人でもみんな、「元気ですか」と声を掛けます。

日本滞在の長いエニさん（中央）はよき相談役

私の大学の所属には、外国人が1人しかいない。だから3年たっても、「あなたは外の人」という扱いを感じています。ちょっと寂しいですね。

ワヒタ●私もいま、幼稚園で日本人のお母さんたちとコミュニケーションをとりたい、インドネシアやイスラムのことを話したいと思っています。でも、日本語の能力が足りず、自分の気持ちがなかなか伝えられません。みんな優しくしてくれるので、自分からもお返しをしたいのです。相手ももっと知りたいと思ってくれているでしょうから、ボディーランゲージも使って、時間をかけて伝えています。通じた時はうれしいですね。

保護者同士、日本人とも話し合いたい

ロクマ●困るのは、私も日本語。それに日本での生活習慣です。子どもが小学校1年になりました。公立学校です。でも、子どもの友だちが家に遊びに来た時に、どうしたらいいかわからない。日本とインドネシアでは家族関係が違いますから、どう対応するのがいいか異なるはず。たとえば、お菓子をあげていいのか、そんなことを迷う。

ほかの保護者とも、ほんとうは直接話したいのですが、向こうが遠慮するようです。担任の先生に話し、私のところにはその先生から話がある。直接コミュニケーションをとりたいのですが、日本人も私たちの習慣がわからず不安なのでしょう。

エニ●それは、言葉の問題もありますが、日本の習慣ですね。子どもに問題があった時、日本語ができる私にも直接には言ってこない。

ユニ●日本語があまりできない私の息子が、言いたいことが言えなくて、発作的に本を投げて人を殴ったことがあった。先生から呼び出されて、私が親のところに謝りに行かねばならなくなった。子ども同士のけんかなんて、インドネシアでは普通です。なんで日本では親が謝りに行かねばならないの。子どもはけんかしてもすぐに仲直りするのに。40度の熱があったのですが、向こうの都合に合わせて夜の9時に、謝るためだけに行きました。

でも、それがきっかけで息子が最後にいちばん仲良くなったのは、そのけんかをした子ども。おもしろい。私の息子はいまインドネシアにいますが、その子がいちばん息子のことを記憶しているみたいですね。小説みたい。

2011年12月17日（土）醍醐石田団地集会所（京都市伏見区石田桜木）にて

＊1　京都市上京区河原町通り荒神口上ル東入ルリバーサイド荒神口1階
http://www.islamjapan.net/ibc/about.html

＊2　イスラムの戒律では豚肉を食べることが禁じられている。また、豚肉以外の食品でも、加工や調理に関してルールがある。このルールを守った食品がハラールである。

4人の出身地、ジャワ島

インタビュー 07

在京都ベトナム留学生青年会

ホイ・タン・ニェン・シン・ヴィエン・ヴィエト・ナム・タイ・キョウト

Hội Thanh niên sinh viên Việt Nam tại Kyoto

1995年に在日ベトナム人の交流と、勉強や生活情報の共有、助け合いのために設立。お花見や紅葉狩りなどの季節のイベント、スポーツ大会を開催するほか、日本語、サッカーなどのクラブもある。

メンバー……約120人
構成……学生80人／社会人40人、単身90人／家族連れ30人、
男性70人／女性50人、約80%が家族連れ

話し手
フィン・ゴック・チャウ（HUYNH NGOC CHAU）さん
ベトナム、ホーチミン出身、大学院生
グエン・ミン・タン（NGUYEN MINH TAN）さん
ベトナム、メコン・デルタ地方出身、大学院生

メンバーのフィン・ゴック・チャウさんとグエン・ミン・タンさんに会の活動について話を聞きました。チャウさんは流暢な日本語で、タンさんはチャウさんの通訳を介しながら、ときおり日本語も交えて答えてくれました。

お二人とも京都工芸繊維大学（左京区松ヶ崎）で化学を学ぶ学生ですね。タンさんは1年半前、チャウさんは10年前の2002年に来日されました。どんなきっかけでしたか。

チャウ●日本製の化粧品や電気製品はとても有名で、技術の発達した国としてとても憧れていました。留学したいと思っていた18歳の時、ちょうど奨学金をもらうことができました。

静岡の日本語学校に1年半通ってから、2004年に京都工芸繊維大学の学部に入学しました。そのあと修士に進み、いま博士課程の2年めです。

タン●私も奨学金で来ました。行き先は自分で決められたのですが、アジアではやはり日本がトップだというイメージから、日本を選びました。この会の存在は友だちを通して知りました。

100人を超える ベトナム人が集まる

どんなメンバーがいて、どんな活動をしていますか。

チャウ●いま、メンバーは120〜30人くらい。80人ほどが留学生、それ以外が働いている人と、その家族です。留学生はどちらかというと理系が多いですね。京都大学や工芸繊維大学、佛教大学、立命館大学などです。

仕事をしている人には、研修生とベトナムの大学を終えてから日本の会社に勤めている人の二つのタイプがあります。ほとんどが電気か機械関係のお仕事です。

会の毎年のイベントは、お正月パーティと、4月のウェルカムパーティなどですね。ほかにも花見や紅葉狩り、スキーや海に泳ぎに行ったりします。

会のリーダーは、みんなの投票で決まります。いまは大学院生が務めています。困ったことがあれば、そのリーダーにいろいろ相談もできます。

ふだんの活動もあります。ミーティングではなく、クラブですね。大学の部屋や施設を借りたりして、学術クラブやサッカークラブ、歌唱クラブ、それに日本語クラブもあります。

タン●（日本語で）日本語は、やはりめちゃくちゃむずかしい。（笑）

チャウ●日本語の授業は大学でもありますが、ベトナム人どうしだと母語で教えられるので理解しやすい。そこでクラブができました。

正月にはみんなが集まり、 にぎやかに楽しむ

1月下旬のテト（旧正月）の会のパーティに呼ばれたことがあります。「京都にはベトナム人がこんなにもいるんだ」と驚きました。料理もたくさんありましたね。

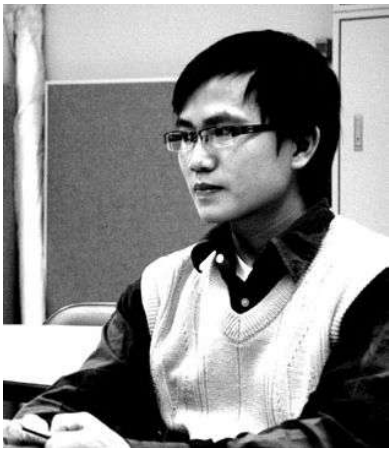
チャウ●新年のパーティでは、いっしょに料理をつくったり、話をしたり、歌を歌ったりしてみんなで楽しみます。たくさんの人が集まる機会はあまりないので、話し込む感じですね。

京都にベトナム食材を売っている店はほとんどないのですが、ネットで探せばなんでもあります。フォーをつくるお米の麺、それにベトナムのハム。

テトなど、大人数で集まるときにたいへんなのは、場所探しですね。費用は基本的に参加者の持ち寄りです。大使館と領事館からも、たとえば日越交流のセミナーやスポーツ大会には援助がありますが、いつでももらえるわけではありません。東京の大使館からではなく、大阪の総領事館からの支援が多いです。

私たち青年会のイベントには、日本ベトナム友好協会も参加していただいています。情報の提供など、留学生を支援してくれる日本人の会です。日本の団体が行う外国人のためのイベントがあれば、メンバーみんなに情報を伝えて、参加したい人には直接参加してもらいます。

フィン・ゴック・チャウさん


グエン・ミン・タンさん

kokoka主催の「国際交流会館オープンデイ」に出店

留学生の関心は奨学金と就職

チャウ●いつもみんなの話題になるのは奨学金のことですね。それに、最近話題になったのは地震。東日本大震災では、けっこうみんなパニックになりました。ベトナムでは地震はありませんから。

留学生はベトナムの大学の学部を卒業し、大学院から日本に来る人が多いです。そして博士課程を終えてベトナムに帰る。京都に来ている留学生は奨学金をもらって来た人が多く、そういう人はかならず帰国しないといけません。でも、私は日本の化粧品企業に就職が決まりました。数年、日本で働いて、それから帰るつもりです。

タン●私はいま、修士課程に在籍しています。進学して日本で博士号を取って、将来はベトナムの大学で教えることになると思います。

学校以外で日本の社会と関わりはありますか。

チャウ●まえは、飲食店での接客などのアルバイトをしていました。接客はたいへんというより、おもしろかった。いまは日本語・ベトナム語の通訳や翻訳、ベトナム語講師とか。京都府の名誉友好親善大使も務めています。

近所の人との付き合いは大家さんぐらいです。お祭りなどがあったら行きますが、町内会はたぶん外国人にまでは声をかけてくれないと思います。

タン●私の場合は学校だけです。工芸繊維大には、ほかの国からの留学生も多いです。いま住んでいるのは留学生のための寮なので、交流はけっこうあります。研究室にも友だちはいるのですが、英語によるコミュニケーションしかしていないので、日本人の生活はわからないことが多いです。

日本の寒さと冷たい食べ物に困惑

日本で困ったことはありますか。

チャウ●困ったことを思い出すのに時間がかかります。(笑)ベトナムと違い、ゴミがあまりないですよね。そして人がちゃんと交通ルールを守っている。それと、障碍者のための施設や設備が道路にもきちんとあります。困るのは、冬の寒さぐらいでしょうか。

タン●年中暑いベトナムの南部から来た私は、日本の寒さにちょっと……。チャウさんはホーチミン出身ですが、私はメコン・デルタ地方です。

チャウさんは上手なのでよいのですが、私がいちばん困るのは日本語です。病気になったときに困りました。言語が通じないので、用紙に記入できないし、自分の病状も伝えられない。

チャウ●病院へは私がいっしょに行きました。

タン●ベトナム人は温かい食べ物を好みます。なんでも温めてから食べるのですが、日本にはお寿司や刺身もありますし、冷たいお弁当でもだいじょうぶなのにはすこし驚きました。

それに日本人は辛いものをあまり食べない。本場のベトナム料理を作るために、トウガラシをどこで買ったらいいか困ります。ネットでも売っているが、日本のトウガラシは辛くない。(笑)

私はなんでも食べられますが、日本は揚げ物が多いので、食堂で1か月食べたらもう飽きるという感じです。

チャウさんは10年も日本におられます。ご両親はなんとおっしゃっていますか。

チャウ●よく質問されるのですが、「がんばってください」とは言っても、「帰ってこい」とは言われません。(笑)これもベトナム人と日本人の違いだと思います。ベトナムのどこの家でもそうでしょうが、子どもがせっかく外国に留学しているのに、「さびしいから帰ってこい」とは言わないです。

タン●ぼくは、言われたことはあります。やはり言われます。(笑)

ベトナム人にも日本人にも開かれた会にしたい

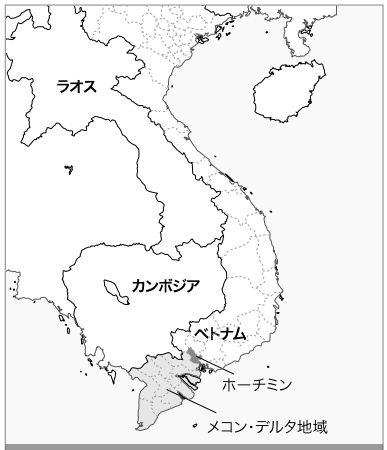
これからの会のビジョンを教えてください。日本人になにか言いたいことはありますか。

チャウ●できるだけたくさんの人に、この会に参加してもらいたいです。京都市以外に住んでいたりして、会のことをまだ知らないベトナム人もいるんですよ。そういう人は一人さびしくお正月を過ごしているかもしれない。できればみんなで集まって、いっしょに楽しんだり、情報を共有したりしたいです。

ベトナム人をおもな対象にしているのですが、日本人にも会のことを知ってもらって、交流を深めることができたらいいなと思っています。

タン●ある程度日本語が話せる人だったら日本の環境に溶け込むことはかんたんでしょうが、言語が通じない外国人もたくさんいると思います。そういう言葉の壁を乗り越えるようなイベントが、もっとたくさんあればいいなと思います。

2012年1月20日（金）kokoka 京都市国際交流会館(京都市左京区粟田口鳥居町)にて



チャウさんの出身地、ベトナムのホーチミンとタンさんの出身地のメコン・デルタ地域

インタビュー 08

ロシアのクラブ

2007年にロシア人女性が、自身の子どもたちにロシア語を教えるために集まる。ロシア語教室のほか、誕生日会やクリスマス会などのイベント、日常的な生活情報の交換を行なう。

メンバー……在京都ロシア人十数人
構成……20代を中心に、30代〜40代。多くは女性で家族連れ

話し手 **西山オクサーナさん**
ロシアのハバロフスク出身、主婦

三条京阪駅近くの「東山いきいき市民活動センター」。このセンターで二部屋を借りてロシア人を親にもつ子どもたちへのロシア語教室を訪れました。教師役を務めていたオクサーナさんも、日本人男性と結婚し、現在は娘一人のお母さん。授業のあと、子どもたちやロシア人のお母さんたちがにぎやかに話をする教室で、オクサーナさんに「ロシアのクラブ」の活動について聞きました。

西山オクサーナさん

子どもたちにロシア語を教えるために始めた会だと聞きました。どうしてそれが必要だと思ったのですか。

オクサーナ●私の娘が2、3歳のとき、友だちが「教えたらどう」と勧めてくれました。やっぱり、みんな自分の娘とはロシア語で話したいでしょう。

最初は、3〜5人くらいが家に集まりました。でも、やはり家ではいろいろ誘惑があって、子どもたちは集中して勉強できない。だから、「部屋を借りよう」となった。

今日はこちらの教室に7人。むこうの教室にも7人の子どもたちがいました。でも、はじめは少人数からだった。

毎回、教材のプリントを事前につくっているのですか。

オクサーナ●そう。家でつくります。最初はロシア語の本を自分で選んで買って、歌や、本を読み聞かせたりしていました。それが簡単でしたからね。でも、だんだん子どもたちも大きくなると、自分で読みたいし、書きたくなる。そこで、私がプリントを準備するようになりました。

子どもの選択肢は多いほうがいい

オクサーナ●会の活動は2007年からだから、今年で5年くらいかな。言葉はもちろん必要だけど、やはりロシアの文化も少しずつ教えたいです。

子どもたちはいろいろ学べます。わかる年齢になれば、ロシア語でも、日本語でも、英語でも、たくさん話せるほうがいいと思います。だんだん大人になって、どれがいいか、自分で選ぶでしょう。

オクサーナさんは、日本の保育園や児童館、フェスティバルなどに出かけて、ロシアの踊りや食事などの文化を教えられていますね。

オクサーナ●食事やゲーム、料理とかですね。子どもたちにとっていちばん簡単なことは、いっしょにゲームをすること。あとは、ダンスや歌が覚えやすいですね。大人とは、いっしょに料理をつくったらいいですね。みんなでつくって、みんなと楽しむ。写真なども見せます。それがいちばん、子どもたちの心をつかみやすくて、便利かな。

ばらばらに暮らす女性たちの貴重な情報交換の場

ロシア語を教えるだけでなく、終わったあとでみんなで話して情報を交換するのですね。

オクサーナ●話をする、これがいちばん大事。(笑)話すことによってストレスも発散できるし、悩みも解消される。

ここの女性は国際結婚をされている方がほとんどですね。住んでいる場所もばらばらではないでしょうか。

オクサーナ●みんなばらばらです。でも、だいたいみんな電話をもっていますし、メールがあります。電話して、「どうかな」、「そうしましょう」と考え、話しあいます。

ふだんの暮らしでは、近所の方はみんな日本人ですよね。コミュニケーションに問題はありませんか。

オクサーナ●私はあまり難しくないです。ほかのロシア人のお母さんたちも、日本語はだいたいできますから。

子育てと医療につきまとう日本語の壁

オクサーナ●娘が幼稚園に通っていたこ

ロシア語教室のようす

ろは、いろいろな手続きの書類の漢字が読めなくて、どうしたらいいかわからなかった。みんなに電話してたずねていました。そうするか、日本人の主人に全部「教えてください」とたずねる。そうして、なにがいるか、いらないか毎日、周囲の人に聞いてばかり。(笑)だんだん自分でもわかってきたので、いまは日本語がわからない友だちに教えています。順番ですね。

やはり言葉の問題はあるのですね。

オクサーナ●娘が幼稚園児だったとき、いろいろ書類を出すときには難しいと思いました。小学校に行くときも……。学校の書類はいまも毎日のようにありますね。ひらがなやカタカナなら、だいじょうぶなのですが。

あとは病院。病院の先生の話で、ときどきは言葉がわからないことがあります。わからないときに私は、「そのことばを書いてください」、「英語で書いてください」と言います。あとで、辞書で調べるのです。

大きく広がるコミュニティの輪

この会のいちばん大きなイベントがクリスマス。3月の「女性の日」や誕生日会などでも集まられているようですね。

オクサーナ●去年のクリスマス会には多くのロシア人が集まりました。150人くらい。京都、大阪、神戸など関西中から集まりました。あんなにたくさん来たのははじめてで、「こんなにもたくさんのロシア人が住んでいるのだな」と。知らない人もたくさん。子どもたちも喜んでいました。

3人くらいで始めたのが、150人も集まるようになった。コミュニティをつくろうと思っていたわけでもなく、ごく自然にそうなりました。いまも、とくに会長は決めていません。やはりパソコン、ネットの力ですね。フェイスブックをみんなよく利用している。

どんな人が150人も来たのですか。子どもたちも入れてですか。

オクサーナ●子どもたちやお母さん、それに旦那。夫は、だいたいみんな日本人です。留学生は少ないですね。ファミリーが多いです。

クリスマスは一大イベント

オクサーナ●クリスマス会をしたのは12月11日、この東山いきいき市民活動センターでした。この部屋ではなくて、もう少し大きいホールです。

最初、子どもたちと大人がいっしょになって、クリスマスの劇をみんなに見せました。それが終わると子どもたちみんなにプレゼントをして、食事をしました。食事はみんな自分でもってきました。何人来るかわからないので、それが便利です。(笑)一人一品とジュースなどをもってきて、それをみんなで食べたのです。ロシア料理も、日本の料理も、いろいろです。時間があるなら自分でつくり、ない人は買ってもってきました。

みんなでいっしょに楽しく勉強

クリスマスには教会に行きたいけれど……

オクサーナ●ロシア正教では、グレゴリオ暦でなくて、ユリウス暦でクリスマスをお祝いします。だから、このごろは1月の6日から7日に教会でクリスマスの大きな会があります。

京都には柳馬場二条上ルに正教会があります。ロシアで信仰されているのと同じ宗派の教会ですね。

オクサーナ●その教会にはよく行くのですが、いつも閉まっている。去年のクリスマスにも娘といっしょに行ったのに、「また閉まっている」。(笑)いつ開いているかわからない。寂しいです。

行ったことはないですが、神戸の正教会はいつも開いているそうです。京都は寂しいです。いつもトントンとノックするのですが。(笑)ほんとうに開いてほしいです。土曜日や日曜日には行きたいですね。

手作りの料理とバザーの品を持ち寄って祝う

オクサーナ●3月8日の「女性の日」、国際

女性デーはロシアではとても大事な日です。男性から女性に、花やチョコレートをかならず贈ります。とても大切な日です。日本のバレンタイン・デーのようなものですが、ロシアにはバレンタイン・デーはありません。

大切な行事はお正月で、その次が3月8日の女性の日。仕事がある人も、仕事が終わってからみんなパーティをする。そのとき、みんな女性になにか贈ります。みんなに花やドレスをプレゼントするんですね。

女性の日は、ヨーロッパでもだいたいあるはずです。日本にはないので、びっくりしました。だから主人に教えました。この日は、なんでもいいのです、小さなお花でも、チョコレートでもいい、できればほしい。気持ちだから、なんでもいいとしています。(笑)

今年のその会のことは、きょうこれから相談します。クリスマスと同じように劇をみせます。ママたちには、「自分でつくったものをもってきてください」と頼みます。服は既製のものでいいですが、料理はかならず自分でつくってもってきます。紅茶などの飲み物も。それに、ママたちの手作りのものを並べて、100円、200円で売ります。バザーみたいなスタイルです。

子どもたちが、ロシアに行くことはあるのですか。

オクサーナ●1年に1回は行きます。幼稚園のときにはいつでも行けたのですが、小学校に通うようになると、だいたい夏休みの1か月だけです。むこうでおじいちゃん、おばあちゃんとも会えます。とても楽しみにして待っていますね。

子どもたちのロシア体験

オクサーナ●私は娘にこう言っています。「ロシアでは、だれも日本語はわからない。自分の力でなんとかロシア語を話してください」と。ロシアで娘は、2、3日はすごく黙る。なにも言いません。おばあちゃんとおじいちゃんはびっくりしますね。

おそらく、自分から話すことにストレスを感じているのですが、だんだん慣れて、少しずつ自分の口で話すようになります。すぐはできません。でも、私の妹には4歳の娘がいます。いっしょに遊びたいので、だんだん慣れていきます。

1か月行って話すのがじょうずになっても、日本の学校に戻ってまた忘れます。(笑)すぐですね。

ここに集まるお母さんの出身は、だいたいハバロフスクやウラジオストクなど、極東ロシアが多いのかな。私もハバロフスクです。

ロシアに帰ると、かならず教会にみんなで行って、いろいろなお願いをします。

活動場所の要件は広くて安いこと

活動場所や資金についてなど、困っていることはありませんか。

オクサーナ●あまりないかな。今日のようにロシア語を教えるなど、みんなが集まるときにはお金を出しあいます。ここ、東山いきいき市民センターは借りやすいです。みんな、住んでいるところがばらばらでしょう。三条京阪駅が近いので、ここに決めました。

まえに借りた、ウイングス京都もよかったです。ここはクリスマス会をする場所として、はじめて探しました。とくに安いし、大きな場所なので。

ハローワークでアルバイト探し

会に参加されているロシア人女性のみなさんは、ふだんはなにをなさっているのですか。

オクサーナ●私はふつうの主婦です。ほかのみんなは、お昼にアルバイトをしています。お皿洗いや、野菜の加工や、工場での作業など、みんな自分でハローワークに行って探して、自分で面接に行きます。

お仕事を探すのがたいへんと聞いていたのですが、アルバイト情報などは必要とされていますか。

オクサーナ●ほしいですね。やはりみんな、子どもがいるでしょう。だから、学校や幼稚園に子どもを送ってからの短時間アルバイトです。短時間でもアルバイトでお店に入るとなると、やはり漢字などがむずかしい。かんたんなアルバイトがあれば、みんなしたいです。したほうがいい。

仕事と子育て、両立がたいへん

お子さんを預けるおじいちゃん、おばあちゃんがいないとお聞きしました。どうされているのですか。保育所などに入れないのですか。

オクサーナ●きのうは、私の友だちが「これからアルバイトがあるのだけど、子どもはすごく風邪をひいている。どうすればいいかな。空いていませんか」と、電話してきました。私はとくに予定はなかったので、依頼を引き受けた。できればそうしますね。

できないときでも、仕事には行かなければなりません。もしも私もだめで、幼稚園にも預けられないとすると……。ですから、そのような場所がほしいですね。

病児保育という制度があって、風邪などをひいた病気の子どもを預かってくれますよ。

オクサーナ●それは知りませんでした。そういう情報を教えてもらえると、便利ですね。

2012年1月28日(土)
東山いきいき市民活動センター(京都市東山区花見小路通古門前上る巽町)にて

オクサーナさんの出身地、ロシアのハバロフスク地方

インタビュー 09

関西フランス学院 APEK

1992年にフランス語での教育に関心のある日仏国際結婚カップルや在日フランス人によって設立。幼稚園児から高校生までが通う学校を、フランス政府認可のもとで運営する。

メンバー……関西フランス学院に通う子ども(78人)とその家族48家族

話し手
水鳥ソフィー(Sophie Mizutori)さん
フランス出身、APEKメンバー
カルドネル 佐枝(Sae Cardonnel)さん
APEKメンバー

二条城の北、堀川丸太町の交差点を西に進んだところに築70年を超す歴史ある建物があります。1998年に近隣の小学校との統合で閉校となった待賢小学校です。この3階建て校舎の一角を使って2003年から授業を行なっているのが関西フランス学院。児童、生徒は京都一円から通います。フランス政府の認可を受けて幼稚園から高校生までの授業を行う学校の保護者会の理事長を務める水鳥ソフィーさんと副理事長のカルドネル佐枝さんにお話を聞きました。

カルドネル佐枝さん

水鳥ソフィーさん

水鳥さんが最初に日本にこられたのが1983年ですね。

水鳥●パリの大学で1年間、日本語を勉強していたころです。テキストに出てくる縁側とかラーメンとか、なんのことかさっぱり想像もできませんでした。東京に行ってはじめてわかった。

日仏を行き来しての子育て

水鳥●次に日本に来たのは1987年で留学生として。広島大学で子育ての比較研究をしました。そこで知り合った日本人の夫と結婚して、フランスで5年間生活しました。そのあいだにできた子ども2人を連れて広島に戻り、7年間暮らしました。

広島では、3人の子どもを日本の幼稚園、小学校に通わせました。でも、私の父が病気になって、私がフランスに戻ることになりました。小学4年生だった長男はフランス語での会話はあまりできなかったので、フランス語を身につけるいい機会だと研究者の夫は日本に残して、子ども3人とフランスに行きました。

2年ほどして再び日本に戻る直前に、息子が「日本の受験は嫌だ」と言いだしました。「受験がない、フランス式の学校ならいいよ」ということで、関西フランス学院に子どもたちを通わせることにしたんです。そのために京都に移って来ることになったんですね。

それから7年になります。私自身は、いまは大学などでフランス語を教えています。息子は去年まで関西フランス学院に通い、いまはフランスの大学で勉強しています。

保護者の熱意から政府認可校へ

関西フランス学院はどういった位置づけの学校なのでしょうか。

カルドネル●フランス政府の認可校です。日本では東京のリセ・フランコ・ジャポネと関西フランス学院だけです。東京の学校は政府直営ですが、私たちの学校は放課後と週末にフランス語で授業する補習授業校から、保護者のやる気で学校に発展させました。

私たちは、補習授業校を神戸でも運営しています。大阪にもあったんですが、いまは休止中です。3校でスタートして、京都だけが発展したかたちです。水鳥さんが広島から移られたように、福岡や東京、名古屋から引っ越してこられるケースもありますね。

幼稚園から高校の部まであるのですね。

水鳥●3歳から17歳までですから。でも17歳は少なくて、いまは1人かな。

カルドネル●幼稚園は、1学年20人くらいいます。小・中学校になると、1学年10人を超えたり、超えなかったり。家庭の事情によりますが、高校生になると本国のおばあちゃんのところに預けるようなケースもありますね。各家庭の判断で、さまざまです。

多国籍の児童・生徒が学ぶフランス式教育

この学校には、フランス以外の国の方もいらっしゃるのですね。

カルドネル●カナダ、ドイツ、イタリア、ニュージーランド、中国、韓国です。

水鳥●ご主人の仕事の関係で、フランスで子どもが生まれて、フランスで幼稚園などに通ったなどの事情です。

高等部は、フランスの通信教育を利用しているのですね。

水鳥●中学校も2年生からそうです。1年生は通信ではなく、直接授業です。

カルドネル●直接の授業にはフランス政府の認可が必要です。去年認可がおりて、いまは試行期間として1年間やっているところです。うまくゆけば、順次申請を続けたいと思っています。

通信教育というと警戒する親もおられますが、きちんと学習すればすべての科目を習得できます。個別指導を受けながら相当量の課題をこなして、添削を受ける。その積み重ねでバカロレア(高校卒業資格)がとれるのです。

水鳥●直接授業を申請するには、各学年、各クラスの子どもの人数を一定数確保しないといけないんです。ですから、増やす努力をいろいろしています。まずは、フランス人学校が存在することの認知を広げる努力ですね。京都だけでなく、大阪や神戸の日仏国際結婚ファミリーの方にも、「そんな学校があるんだ」と知っていただく。経済的に難しいと思われたりする誤解も解かないといけないですね。

子どもたちの作品

地域の運動会やバザーに参加

地域の方がたとどのような関わりをもたれていますか。

水鳥●たとえば、この学区の年に一度の運動会には参加しています。綱引きはだいたい毎年1位だったのですが、今年は3位で少しショック。

カルドネル●同じ敷地内にある待賢幼稚園といっしょにバザーをさせていただいたりもします。保護者のお母さんが出てこられますから、お互いに顔をあわせて、「こんな人たちなのだな」と感じてもらう。ふだんはきっと、「なにをしているのかな」と思われているような雰囲気なので……。(笑)

国際交流の勉強や視察などで、日本人が訪問することはないのですか。

カルドネル●残念なことに、それがないですね。フランスに行かずとも、フランス式の教育を学んだり、研修したりする手間がはぶけると思うのにね。

京都は外国人に冷たい

日本で暮らすなかで、嫌なことや腹のたつことはありますか。

水鳥●一つあるのですが、外見が違うのだからしかたがないですね。じっと見られるのが少し嫌なところです。

まだ京都はいいんです。京都は観光客が多いので外国人に慣れています。広島はものすごく違います。広島ではどれだけ指をさされたことか。(笑)

私が京都のお店に入ると、広島のように「こわい」という顔はされません。ですが、レジで「いくらですか」と聞くと、レジの数字を見せられます。「どうせ1,262円と言ってもわからないだろう」と指でレジの数字をさすのです。

カルドネル●私たちは神戸で補習授業校をひらいているので、つい比べてしまうのですが、やっぱり神戸の人たちは、住んでいる外国人に慣れておられます。居留地の歴史を感じますね。

京都では、外国人はみんな観光客。あるいは、そうであってほしいという気持ちではないでしょうか。すぐに帰ってほしい、そんな印象を残念ながら感じますね。

進学先は日本も、フランスも

水鳥●日本の大学に入った子はこれまでにもいますよ。私の息子はフランスの大学に進みましたが、大学院は日本に戻るかもしれません。会社の研修などもあります。「ぼくも日本の会社で研修したいです」とも言っています。書くなどの日本語の能力は、フランスでも評価してもらっていますので。

日本語もできるのですか。

水鳥●もちろん。それがここの保護者の特徴といいますか、希望です。両方で

教室のようす

学校では日本文化も学ぶ

きる学校として続いてほしいんです。フランス人のための学校ではなくて、どちらの社会でも歩いてゆけるような人間を育てたいんです。

カルドネル●それが関西フランス学院の特徴です。東京にある直営校の子どもたちは、企業の東京支社の家族だったり、フランス語圏の国ぐにの大使館関係の職員の家族だったりします。ですから、どうしても一時的に日本に来る人たちの子どもの教育を請け負うかたちの教育になりますね。

日仏を行き来する子どもを育てる

カルドネル●関西フランス学院は、両国のかけ橋となる人材を育てるというスタンスをあえてとっているんですよ。

「関西フランス学院はフランス人を囲いこんで、フランス人そのままに育てている」という目で見られがちです。しかし、私たちはそうではないということを、日本側にもフランス側にも呼びかけたいんです。私たち、秘密組織ではないのですから。(笑)

廊下に習字がたくさん張ってありました。フランス人らしい名前も、日本人らしい名前もありましたね。

水鳥●日本人らしい名前は、私の娘かもしれません。(笑)

カルドネル●私たちはフランス政府に、せっかく日本にある学校なので、「現地である日本の方針に」とさせてもらいました。これは政府のトップの方がスピーチしていることなのですが、「フランス語の教育をするのではなく、フランス式の教育だ」ということです。スタイルがフランス式であっても、教える内容がそうとはかぎりません。

たとえば、ベトナムにある学校なら、ベトナムの文化も言語もあるていど、いっしょに教えようじゃないか。日本にある学校なら、日本の文化と言語を教えようではないか。そのようなスタイルです。私たちも、「日本語の授業を週に3時間半させてください」と交渉して認められたんです。

フランス式教育とは一言で言えばなんでしょうか。

カルドネル●ディテールに違いがあるかなと思います。たとえば、宿題の出し方や先生の態度などです。なにか、「こんな看板がある」ということではないのです。

知識を伝えるだけではなくて、自分で考えることに比重をおいているのでしょうか。

水鳥●そうですね。授業では討論もあります。自分の意見を言う場です。個性をいかすことが主眼ですね。

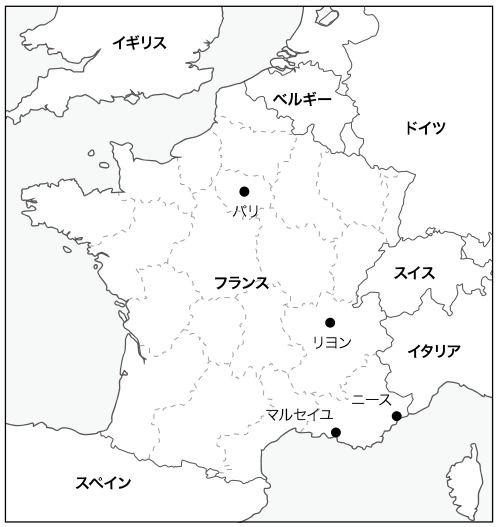
家族との時間を大切に

水鳥●フランスの教育のアピールになるのではないかと思うのですが、上の子が高校生のとき、私たちは週末の土曜日にピクニックとバーベキューをクラスごとに家族参加でしました。

私たちは家族関係を大事にします。子どもの教育は学校まかせではありません。学校生活は学校での時間にかぎる。それ以外は、宿題して家族と過ごすのがふつうのスケジュールです。

日本はクラブ活動で休みの日も潰れてしまうことが多いようですね。ただ、日本と同じく、若者や若い夫婦の教育の目標がだんだん変わってきたような気もします。それぞれの家庭の事情もあるので、ある方針を一概に適用するのはむずかしいかもしれませんが。

2012年2月8日(水)
関西フランス学院(京都市上京区藁屋町)にて



インタビュー 10

京都インド人協会 Kyoto Indian Association

留学生、研究者を中心とする京都在住インド人のコミュニティ。情報交換やインドの祭りをいっしょに祝う。

メンバー……学生15人(但し、ソーシャルネットワーキングサイトOrkut内には約200人のメンバーが登録)
構成 ……男性12人/女性3人、20代50%/30代40%/50代10%

話し手 **ヴィマール・クマール(Vimal Kumar Hatwal)さん**
インド、ウッタラーカンド州出身。研究職

Kyoto Indian Associationは、留学生や大学研究者を中心にした在京都インド人のコミュニティ。会員名簿があるわけでもなく、会則があるわけでもない。なんとなくつながるインド的ともいえる不思議なグループ。京都大学に勤める研究者であるヴィマールさんに、英語に日本語を交えながらインタビューに答えていただきました。

ヴィマール・クマールさん

ヴィマールさんの経歴を聞かせてください。

ヴィマール●私の生まれは、インド北部のデヘラードゥンです。ネパールや中国との国境に近いウッタラーカンド州の都市で、デリーからは250kmほどです。家庭ではヒンディー語を使っていましたが、インドでは早い時期から英語が使われる教育システムです。

大学を卒業する21歳までは郷里のデヘラードゥンにいて、同じ州内の農業工科大学で修士号を取ったあと、再び郷里に戻り仕事に就きました。

その後、日本の文部科学省の交換留学の試験に通り、京都大学大学院に留学を申し込みました。専攻は都市環境工学です。

この会はいつできたのですか。

ヴィマール●私は2006年に来日しましたが、この会はそのまえからありました。2010年まで日本にいて、一度インドに帰国し、2011年に再来日しました。

日本に戻って、会の活動を再開したのですね。

ヴィマール●はい、グループは存続していたのですが、あまり人が集まらなくなっていたんですね。そこで、私がたくさんの人に声をかけて、組織として再びまとまりました。

コミュニケーションの要

ヴィマール●グーグルが運営するorkutというソーシャル・ネットワーキング・サイトのなかにグループがあり、そこに200人くらいのメンバーがいます。インドから新たに来る人が、京都にどんなコミュニティがあるか、orkutやfacebookで検索しますね。そうして私たちを見つけて連絡してきます。

メンバーには留学生のほか、ソフトウェア会社の社員などもいます。それに、インドに帰国した人もメンバーです。Orkutでの活動を始めたのは2007年からです。

ネットでは、どんなことが話題になるのですか。

日本での生活にはいろいろな困難があります。多くのインド人はベジタリアンですから、とくに問題になるのは食べ物。レストランと食料品の情報ですね。インドの食材は、京都ではなかなか手に入りません。豆やスパイス、それにコメもタイプが違いますからね。

そうすると、これから家族を連れて日本に来るのに、なにを持ってくればよいかわからない。そこで多くの人が最初に私にたずねてきます。

それに、どんなイベントがあるかですね。お祭りやお祝いの場所や日時をたずねてきます。

コアメンバーは留学生と研究者

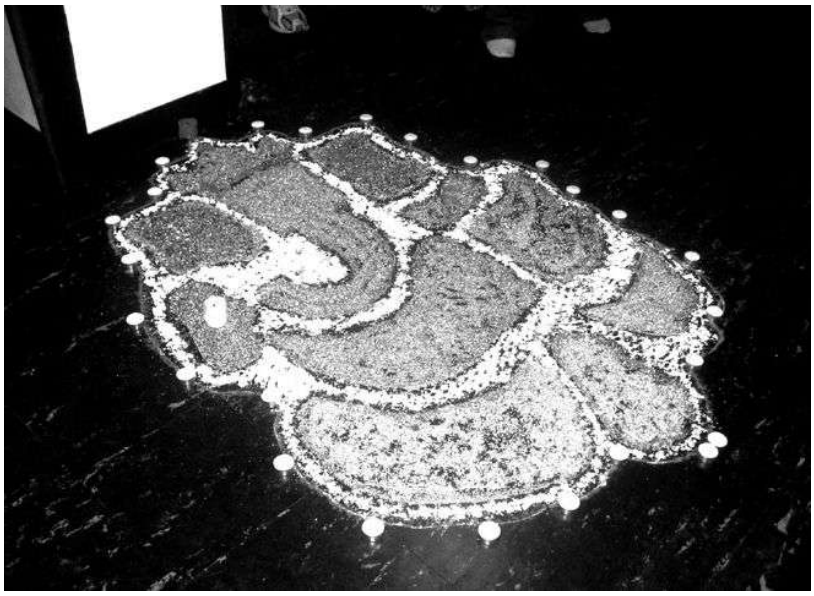
ヴィマール●インド人のコミュニティがもう一つあります。インド人と日本人の科学者による大きなコミュニティです。Indian Scientists Association in Japanで、学術大会やセミナーの情報を交換する研究関連の組織です。ウェブサイトもあり、学術関連のイベントが毎月開催されています。東京が中心のコミュニティですが、京都にも小さいながらグループがあります。

そのグループは科学者だけですが、私たちのグループには、会社員や公務員もいます。でも、いちばん多いのは大学関係、研究員や博士課程の院生ですね。会社員や公務員として日本に来る人の滞在期間はだいたい半年か1年で、プロジェクトが終われば帰ります。それに比べると学生や研究者は長く、博士課程なら3年以上、研究員で2年ぐらいはいます。

大学を終了して就職しても、コミュニティのメンバーであり続けます。私たちの京都のAssociationには、日本人もたくさん参加しています。

年に一度のお祭り「ライト・フェスティバル」を祝う

ヴィマール●2007年の「ライト・フェスティバル」の写真を見てください。これはきれいに彩色したヒンドゥー教の神さまです(32ページ上)。京都大学の近くの「京都国際学生の家」でお祝いしたときにつくりました。大きなホールがある民間の施設なので、一日借りられるようにお願いしました。キッチンもありますから、自分たちでインド料理を作って楽しみました。



ゾウの頭をもつヒンドゥー教の神ガネーシャ。赤、青、緑とカラフルにデコレーションされ、周囲をロウソクが取り囲む

「ライト・フェスティバル」というのはヒンドゥー教のお祭りですか。

ヴィマール●そうです。私たちのメンバーのほとんどはヒンドゥー教徒です。ムスリムも1人いますが、彼もいっしょに楽しみました。時期は10月か11月です。ヒンドゥー暦にもとづいているので、年によって動きます。

インドでも大きなイベントですか。

ヴィマール●そう。みんなで時間を過ごし、ごはんを食べます。インドでは家をライトで飾りつけて、野外のオープンスペースで、めいめいが花火を打ち上げます。京都では花火はできませんが、インドの料理や歌、いろいろなイベントを考えて楽しみます。

このときは、何人くらい集まったのですか。

ヴィマール●30人くらいでしたね。

2008年には、修学院の京都大学国際交流会館でお祝いをしました。部屋をたくさんのライトで飾りました。留学生の子どもたちも参加しました。日本人の友だちを連れてきた人もいましたよ。

パーティの会場探しは一苦労

ヴィマール●日本に戻ってきたばかりの2011年は、ライト・フェスティバルができなかった。集まったのですが、お祝いはしなかった。忙しかったのも理由ですが、使える公共の場所がなかったからです。料理をするスペースが必要なのですが、そういう場所が見つからなかった。あまりよく探さなかったからだと思うのですが、やっぱり場所探しはたいへんです。

日本の情報をメンバーに伝える

お子さんや家族づれで日本に来ている方も多いのですね。

ヴィマール●でも、日本に来るまえは、だれも日本の子育て事情はわかりません。心配です。だから、先に日本に来て子どもを学校に通わせている人から、手続きや予防接種などの情報を得ます。それに、ほとんどの留学生には大学から派遣されたチューターがついています。そういう人もていねいに教えてくれるので助かります。そういう情報も、ネットで共有するようにしています。

女性同士、お母さん同士で集まったりするのですか。それとも、お子さん連れの女性もみなさん留学生ですか。

ヴィマール●この写真の女性たちはみんな留学生でした。女性同士が個人的に会うことはあると思います。インドを離れて暮らしていれば、たいへんなことはいろいろあります。だから、近く

2007年の「ライト・フェスティバル」

に住んでいる仲間がいれば、とうぜんよく顔を合わすでしょう。日本人の友だちもそれぞれにいますから、女性がずっと家にいるようなことはないですね。子どもが学校に通っていれば、日本語教室もありますので、外とのつながりはあるわけです。

この会にインド料理のレストランに勤めている人の参加はないのですか。

ヴィマール●まったくありません。彼らはとても忙しくて、時間がとれませんから。

2008年の「ライト・フェスティバル」

郷に入っては郷に従う

日本の印象は、こちらに来てから変わりましたか。

ヴィマール●インドの大学に通っていたころは、日本は科学・技術がとても発達した国という印象でした。それにスシと自然災害。強いモチベーションをもって自然災害に立ち向かうという印象。これは、日本に来ても変わりませんでした。日本の人たちはとても親切です。私たちが困っていると、最善のことをしようとしてくれます。

ある国に来たら、その国のルールに従う。私はそれがいちばん大切だと思っています。

日本人は直言を避けますが、それで嫌な経験をしたことはないですか。

ヴィマール●そうですね、ちょっとしんどいときもあるけど……。でも、ルールや伝統を守ることはそんなに難しいわけではありません。

ただ、インドでは、だれかがもし間違ったことをしている、これはおかしいと思えば、はっきりと「それは違う」と言います。けれど、日本ではそうではないですね。

だれも完璧な人はいないから、間違いだと言われなければ、間違ったことを続けてしまうのが人間。だから、言われたほうがいいのです。でも、日本では、そういうことがあまり言えない空気がある。そういう文化なのだと思うのですが……。いつもmaybeをつけて、はっきり100%とは言わない。あいまいですね。

コミュニティでは、あまり日本の問題は話しません。インドの政治などについて話し合うことのほうが多いです。

離れても続く日本との関係

ヴィマールさんは今後、日本とどんな関係をもちたいと考えていますか。

ヴィマール●個人的には、インドに帰って職に就きたいですね。もちろん、帰っても日本の教授や大学の仲間たちとは連絡を取ると思います。

最近のインドと日本関係はいい方向へ進んでいて、いろいろなプロジェクトがあります。そうしたプロジェクトに応募するかもしれません。もし、私がインドの大学に職を得たなら、留学情報のやりとりもできますね。日本との関わりは続けたいですね。

このグループと日本の地域社会との関わりはありますか。

ヴィマール●祇園祭に参加した先輩もいます。そういう個人的な関わりはあるとは思いますが、グループとしてはありません。

あるような、ないような、それでもしっかりと結びつく

いろいろな外国人グループからお話を聞かせてもらいましたが、インドの方のコミュニティのありかたは、タイプがちょっと違うように思います。

ヴィマール●そうですね。目的がちょっと違うのかもしれません。

この会はある種のプラットフォーム、踏み台です。オフィシャルな集まりでもなく、登録制度があるわけでもありません。はっきり存在しているようには見えない。けれども、どこかで、なんとなくつながっている。インターネットの存在は大きいですね。インドに帰ってもアカウントが取り消されるわけではないので、日本のことをちゃんと見ています。

ヴィマールさんは、いまは家族といっしょに暮らされているのですね。

ヴィマール●妻と娘といっしょです。娘はまだ生まれて2か月です。大津の日赤病院で産まれました。幸い、担当の女医さんは英語を話せました。

妊娠中は、私の母が2か月間こちらにいました。妻と娘は、2か月後には帰国します。私も2013年3月には帰るつもりです。日本で出会った友人、知人、とくに研究室の友人たちには、心から感謝しています。

2012年2月11日(土)
kokoka京都市国際交流会館にて

ヴィマールさんの出身地、ウッタラーカンド州

インタビュー 11

NPO法人 京都コリアン生活センター エルファ

在日コリアンをはじめ、異文化を背景にもつ高齢者・障碍者を支援することを目的に2000年に設立。居宅介護、デイサービス、訪問介護の高齢者支援事業、共同作業所を運営する障碍者支援事業、多文化共生事業、子育て支援をするほか、ホームヘルパー講座を開設するなど広範に活動。デイサービスは、ハナマダン東九条、ハナマダン南京都(宇治市)、ハナマダン洛北、ハナマダン洛西の4拠点がある。

話し手 **南 珣賢(ナン・スンヒョン)さん**
NPO法人京都コリアン生活センター　エルファ事務局長

日本の社会がおかれた高齢化の問題は、在日外国人にも無関係ではありません。京都コリアン生活センター「エルファ」は、在日コリアンの高齢者支援事業からスタートしたNPO法人です。事務局長をつとめる南珣賢さんに、外国人の高齢者介護の現状と今後の展望を聞きました。

エルファを設立された経緯を教えてください。

南●2000年4月から施行された介護保険制度がきっかけです。社会保障制度の外で生きてきた在日コリアン一世の方がたは制度を使いこなせない。自分たちには関係ないと思い、あきらめて無関心になる人もきっといるはずだ。当時50歳代だった在日二世たちは、そのように心配しました。

在日一世に社会保障を届けたい

南●言葉やその人の生活歴、食べものや歌の好みなどを、あるていど把握している二世たちのケアがあれば、一世の方がたは安心して老後を過ごせるのではないか。そこで、グループ勉強会を始めたのをきっかけにNPO法人として設立しました。

12年たって、利用する方がたも一世から二世へと変わってきています。ニーズも変わるし、これまでどおりではうまくいかない。変えねばいけないものもありますが、守るべきものもある。

ニーズの変化というのは、具体的にはどういうことですか。

南●一世の多くは就学経験がほとんどなく、日本語の読み書きができません。介護制度もあまり理解されていませんので、すべてを私たちに委ねます。「私のプランはあなたの言うとおりにして」、「ぜんぶ、あなたの言うとおりにするから」と、ある意味ではやりやすさもありました。

一世の多くは「趣味なんてよくわからない」、「生き甲斐がなにかわからない」という人たちです。ですから、言葉が通じて、自分が朝鮮人であることを隠さず言える場所を用意する。これまでの人生でできなかったことをして、楽しみを取り戻してもら　たい。そういうサービスを提供する仕事でした。

一世の背中を見て育った二世たち

南●二世は、就学経験をつんでいて、介護保険についてわかる人も少なからずいます。エルファでなくても、一般のデイサービスで生活を楽しむこともできる人たちです。一世の背中を見て、「自分の子どもには日本人に負けない学歴を与えたい」などと考え、子どもを懸命に育ててきた親たちの世代です。自分の意志がはっきりありますから、言われたとおりのことをするのは嫌。

そうしたニーズに応えるのは、センターの稼働率を維持する点からも重要です。事業所を守るためにも、いかに二世の利用者を確保するかは、いまの課題だと思います。

利用者の世代が変わっても、エルファとしてなにを維持したいですか。

南●代償を求めずに苦労された一世に、すこしでも喜びや楽しみを与えたいという二世たちの思いは、世代が変わっても引き継ぐべきことだと思います。

コリアンのための組織から、次のステップに踏み出す

南●利用者には、日本人もいます。たとえば、自己主張がはっきりしている日本人のおばあちゃん。「あの人ははっきり物事を言いすぎるわね」ということで、日本のデイサービスで居場所がなくなった人がここにくる。ここだと、言いたいことを言いあえるという感じですね。私は日本人の利用者が入ってきたことを、とても喜んでいます。

コリアンを受け入れるだけでなく、自分をさらけだせない事情のある人など、いろいろな境遇の人たちが利用できて、自分らしくあるがままの姿でい

日本各地から見学者が訪れる

られる場所を追求するのがエルファらしさなのだと思います。

多文化や多様性をスタッフが理解するトレーニングをされているのですか。

南●在日コリアンの職員のうち、三世くらいまでは日本に住んでいてなんらかの不便を感じて生きてきた人たちです。そういう人たちは、あえて研修しなくても肌でわかる、感じとることができると思うのです。この人はこういう思いをしているのではないかな、ここがしんどいのではないかな、と想像力を働かすことができる。ですから、とくに研修はしてきませんでした。

しかし、世代が変わるとわからなくなるかもしれません。すでに四世の職員もいます。コリアンだからといって、共通の経験や価値観をもっているわけではない。そういう人たちにどう対応するかは、これからのテーマです。

職員のほとんどがバイリンガルです。日本語のほうがわかりやすいという二世の利用者たちも増えていますが、あるていど受け答えができて、言っている意味がわかる状態ではいます。

外国人介護のフロンティアとして

外国籍の人の高齢化にどう対応するかという点で、エルファの取り組みは日本のなかでも一歩先をいっています。ノウハウを教えてくださいという希望が寄せられることもあるのでは……。

南●ええ、最初に関わったのは中国帰国者への対応です。介護職員や看護師を対象に中国語講座の準備をされていたNPO法人から「話を聞かせてください」との依頼がありました。私たちは、資格をもっている人たちに言葉を覚えてもらうよりも、中国帰国者の二世、三世が資格を取ったほうが合理的だし、いちばん利用者に寄り添ったケアが実現できると提案しました。

すでに資格をもっている劉偉さん*たちとお会いしたのですが、仲間がいなくて決心に至らない感じでした。やはり仲間づくりが出発点ですね。

自分たちの親の世代の老後を考えると、親たちが自分の言葉で意思疎通ができるヘルパーは絶対に必要だという問題意識をもつことがまず必要ですね。そして、そういうことを可能にする施設とヘルパーを自分たちで育成する環境づくりをする。私たちも、そうしていまに至っています。

恒例行事のエルファまつりでは事業所ごとの出し物を披露。この日はハルモニたちが手話コーラスに挑戦した

中国帰国者も高齢化しますから、ぜったいに需要はあるよということで、ようやくかたちになりつつある感じですね。今後はたぶん、日系ブラジル人も問題になるでしょうね。

ニューカマーの利用者はいますか。

南●はい。ただ、震災の影響で帰国した人もいたので減りました。ほとんどは日本で就労していて、日本で結婚した人たちです。今後はそういうニューカマー――新たな一世の利用者も出てくるでしょうね。

在留資格で、たとえば日本の大学を卒業した留学生が、訪問ヘルパーとして在留して仕事をフルタイムでするパターンはありえますか。資格を取るのは難しいのではないでしょうか。

南●ケアスタッフにも、そうしたニューカマーはいます。そういう人は、デイサービスではなく、訪問ヘルパーに多いです。

人材確保が大きな問題

南●それでも、エルファには、日本の大学を出て就職した中国朝鮮族の若い人が1人います。日本語も朝鮮語も中国語もしゃべれるから、今後の対応を考えれば適任だと思います。

ただ、大学を卒業して就労ビザを取得するのはたいへん厳しかったですね。ですから、ビザ取得の申請書にこんなことを書いて説得しました。

私たちの介護事業も、だんだん「多文化」化しています。コリアンのための介護事業として始めたのですが、これからの対象はコリアンに限らない、いろいろな背景をもった人たちへの支援が必要になってきます。そのときに、彼女のこれまでの経験がエルファには欠かせないと。

じつは、すでに中国からの帰国者を私たちは支援していたんです。「こういう人にサービスを提供するには、中国語ができるスタッフは欠かせない」と伝えました。なんとか「人文知識・国際業務」資格でビザが取れました。

介護職では、「専門職」としての就労ビザが出ないのですね。日本はいま、フィリピンやインドネシアから看護師の資格をもっている人を、日本に受け入れる施策をとっていますが。

南●私はむしろ、すでに日本にいる在日外国人に積極的に日本の資格を取らせる制度をつくればと思います。そこにお金を使うほうが現実的でないでしょうか。

積極的に外部の人とふれあう機会

エルファは、外部からの見学や学生ボランティアなどを積極的に受け入れておられますね。

南●外の人が来ると、職員もしゃきっとします。利用者も若者たちが来ると嬉しいのですね。やがていなくなってしまう一世たち――あと4、5年かなと思いますが、そう考えれば、ふれあいたい来訪者はありがたい存在です。そういうふれあいは、おかしな先入観を取っ払うよいきっかけです。

見学にはアメリカ人、中国人、日本人、コリアン、いろいろな人が来ます。できるかぎり引き受けるスタンスです。

韓国からも研修生の方を受けいれているのですね。

南●そうです。泊まりがけのボランティア研修や、中学生や高校生、大学生のグループもあります。修学旅行ではなく、ボランティア体験をする目的で登録している団体もあります。夏休みを利用して日本の在日の勉強をしたり、文化の勉強をしたりする。カトリック系の団体が多いので、支援活動もしつつです。韓国からの訪問には、利用者はいっそう喜びますね。

介護の基本は、だれが相手でも変わらない

南●デイサービスの利用者に教わることは、とても多いんですよ。こんな例があるんです。じつは、聾唖者でコリアンの職員がいます。コミュニケーションもとれない、電話も受けられない、なにができるのだろうと、リスクばかり考えてしまいましたが、一度研修で受けいれることにしました。

利用者に紹介するとき、「この方は耳が不自由なので、口を大きく動かして、ジェスチャーで自分の気持ちを伝えてください」と言いましたら、大笑いです。「私たちが日本に来たときと、まったくおんなじ」と。「私たちが日本に来たときは、耳があって音は聞こえても、なにを言われてもわからなかった」、「けど生きていけんねん。だいじょうぶ、だいじょうぶ」。ハッとしました。

たしかに電話は受けられないし、加われない業務もあります。しかし、ぜんぜん問題はありませんでした。耳が不自由なぶん、察する能力に長けていました。気が働くのです。そのうち利用者が手話を覚えはじめて、「そうやって助け合っていきていけんねん」という言葉で、私たちも目が覚めたといいますか……。

これは日本の事業所でも、みんなそうだと思います。介護はその人の人生にたずさわる仕事ですから、ある意味では重たいのですが、人生にとってだいじなことを吸収することになります。

状況の変化を捉え、事業に活かす

エルファの設立は2000年だそうですが、状況はいまとはまったく違ったのではありませんか。

南●はい。拉致事件や小泉首相の訪朝があったりして、とてもしんどいときでした。拉致があり、韓流ブームがあり、ほんとうに在日をとりまく環境は変わりました。どうしても本国の情勢に左右される立場にありますし、その意味でとても不安定です。

自分の国に行っても外国人扱いされ、日本でもつねに外国人。「いったい自分はなんなんや」という不満や課題を抱えている人たちも多い。でも、在日は在日でしかないわけですから。

在日としてのアイデンティティがあるわけですね。

南●そうです。三世、だいたい40歳代から上の人たち。私は二世ですが、私くらいの年齢から上の人にあります。だから感覚が古いと言われます。（笑）いまだに本国に親戚もたくさんいますし、本国の情勢がうちの家族の問題に降りかかってきますからね。たとえば、北朝鮮に行けないとか、韓国の大統領が代わったら、たちまちいろいろな規制がかかるとかがあるんです。

しかし、三世くらいになると、そういう親族も減ってきます。そうなると、やはり日本でどう豊かに生きていくかを考えます。

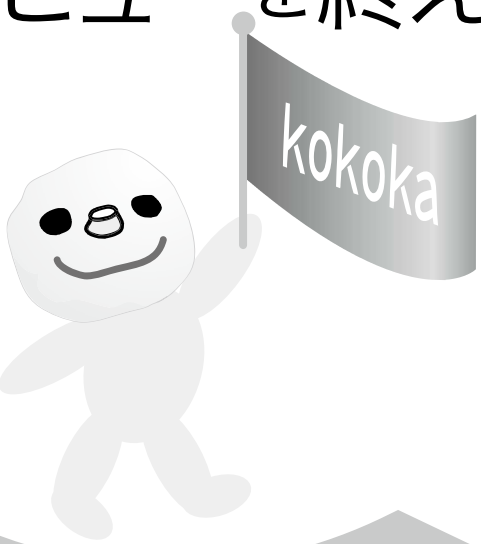
歴史的なことも知ったうえで、日本と朝鮮半島の友好関係を築く仕事につきたいと思っている人がけっこういます。若い学生さんたちなので、いっそう嬉しいですね。

2012年3月5日（月）
京都コリアン生活センター エルファ（京都市南区東九条北松ノ木町）にて

＊劉偉さんについては、13ページのインタビューを参照。

京都地域外国人コミュニティ 基礎調査

インタビューを終えて



お隣さんは外国人

京都の多文化社会の実像に迫る

公益財団法人 日本国際交流センター
執行理事
毛受 敏浩

はじめに

京都市には2011年末現在、41,000人の外国人が暮らしている。日本が世界に誇る国際観光都市である京都を訪れる外国人観光客は年間100万人を数えるが、その一方で、京都市に住む外国人もその人口の3%近くに達している。

京都市民にとっては外国人の存在は身近なものであるはずだが、彼らの京都での暮らしぶりを理解している市民は意外に少ないのではないだろうか。「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」は、京都に住む外国人の日々の生活を明らかにするとともに、外国人として一括りにとらえることのできない多様性、さまざまな暮らしぶりを一般の市民に知ってもらうことを目的として実施した。

焦点を当てたのは、外国人コミュニティの存在である。2011年末現在で、京都市には136か国の外国人が定住しているが、同国人が数百人におよぶ規模で住む外国人は独自のネットワークを構築している。日本で暮らすにあたっての情報交換を行うほか、自国のお祭りや宗教行事を維持するなど、異国で生きるためのさまざまな生活の知恵を身につけて暮らしている。

大学が多い京都には留学生も多いが、数年間で帰国する彼らも独自のネットワークを持ち、新しい学生へと引き継ぐことでネットワークを維持している。また日本をふるさとと考え、終の棲家として京都に定住する外国人もいる。今回の調査では、11団体にインタビューを行ったが、彼らの京都での生活ぶりが鮮明に伺える。

在住外国人のネットワーク

海外に移住した日本人が日本人街を作るように、日本に住む外国人がコミュニティを作るケースがある。横浜や神戸の中華街がその典型だが、言葉や文化の異なる異国の地で、その土地の情報をシェアし、またあるときには自国の文化を仲間と共有することで癒され、明日への活力の糧にするというのは、海外で暮らす人間が編み出した暮らしの知恵といえる。

京都では、中華街のように特定の地域に一国の住民が集住するような状況は生まれていないが、それでも同じ国の人同士はお互いに関係を深め、おのずとネットワークを形成していく。今ではそのネットワークはフェイスブックなどSNSを介したものになり、特定の地域に集住しなくとも同じ国の出身者が繋がり、コミュニティを形成している。

京都市の中にあるそうしたコミュニティの例として、ベトナム人留学生青年会がある。1995年に発足し、ベトナム人留学生を中心に100人以上が参加している。彼らがこうしたネットワークを組織するのは、お正月のパーティなど、ベトナムの文化を同国人とともに祝いたいという気持ちがあるからであろう。また日本での生活でわからないこと、困ったことを先輩の留学生から学ぶ上でも有益である。さらに外国人にとって自国の食文化は懐かしいものだ。ところがベトナムの食材は京都ではなかなか手にはいらないという。ベトナム人にとって、自国の食材がどこで買えるかは重要な情報となる。もちろん留学生にとっては、勉学や就職など先輩に相談しアドバイスを受けられるコミュニティは極めて大きな存在である。

インドネシア人女性によるコミュニティも京都にある。An-nisa shalihahと呼ぶこのグループの活動は多くのインドネシア人がムスリム（イスラム教徒）であることから、コーランをともに詠み、日常生活の課題などさまざまなテーマで話し合われている。日本語が流暢なインドネシア人留学生にとっても、インドネシア語で同国人と話し合える場は貴重な息抜きの場所である。メンバーは数年のうちに入れ替わる場合が多いものの、メンバーに赤ちゃんが生まれると皆で祝うなど、仲間として一体感のあるコミュニティができている。

ムスリムのインドネシア人が日本で苦労するのは、食事である。日本食が口にあわないというのではなく、厳格なムスリムは戒律によって豚肉を食さないなどのさまざまな決まりがあり、ハラールと呼ばれる宗教的に許された正しい食事をとることが求められる。単に豚肉を食べないという単純なものではなく、お菓子で使われる油やショートニングが植物性か動物性かも確認しないと、厳格なムスリムは食べることはできない。その意味で、日本で入手可能なハラール食品についての情報交換が不可欠であり、彼らは、一般の日本人の想像を超えたさまざまな悩みや課題を克服しながら生活している。

その点はインド人も同様である。ヒンズー教徒の多いインド人の多くはベジタリアンであり、野菜は入手できても

インドで一般的に食べられているスパイスなどの食材が京都では手に入りにくい。京都インド人協会には200人ほどのメンバーがおり、学生や研究者、IT企業の社員などが参加している。食品についての情報交換だけではなく、秋にはライトフェスティバルと呼ばれるお祭りを祝うが、インド人ばかりではなく日本人も参加する。

異国で暮らす外国人にとって心の拠り所となっている施設に教会がある。例えば、カトリックの多いフィリピン人にとって、教会はもたれかかれる大きな背中であり、教会の存在なくして安心して日本での生活を送ることは難しい。キリスト教徒の多い韓国人にとっても同様で、日本での生活に苦しんでいた時に教会に救われたという韓国人もいる。一方、ロシア人にとってロシア正教は心の支えである。京都に住むロシア人の多くは日本人と結婚した婦人であるが、日本での生活が長くなってもロシア正教と関わりが切れるわけではない。しかし、京都市内にロシア正教会はあるものの閉まっていることが多く、ロシア人にとっての悩みの種になっている。

日本と京都に対する思い

インタビューを受けた外国人が口を揃えるのは、日本が清潔で安全で利便性の高い国であることである。そして日本人は時間を守り、親切な人が多く、だらしない人がほとんどいないということ。多くの外国人が、日本の暮らし自体は快適であることを指摘する。

京都についても古都の素晴らしさを感じて暮らしている人が多い。一方、日本人とのつきあいについては、多くの外国人が「本音と建前を知るには時間がかかる」、「人間関係が難しい」、「友達になるのに時間がかかる」と指摘する。外国人には地域社会に溶け込んで暮らすのが難しい都市だと感じている人が多いようだ。

日本で困ったこととして、日本人と結婚したフィリピン女性は、「お弁当づくり」と答えている。フィリピン人は本来おおらかであるが、お弁当に何をいれればよいのかわからないという。日本の社会は他人を気にし、他人と比べ、細かなことにも注意を払う。それを彼らは敏感に感じ取り、しだいに神経質になっていく。

日本人と接し、日本人と付き合いながら暮らしていけるかどうかは、日本での社会的な立場や日本語の能力によっても大きく異なる。漢字圏以外から来日した外国人にとって、日本語の習得は極めて難しい。成年になって漢字圏以外から日本に来た外国人にとって、日本人の成人レベルの日本語ができるようになるのは不可能に近いようである。

ある程度、日本語ができる外国人は多いものの、生活で困るのは医療機関にかかる場合や学校から子どもが受け取ってきたプリントが読めないことなどである。また高齢化が進む在日韓国・朝鮮人一世には、ハングルで対応してもらえる高齢者介護施設が必要になっている。

漢字圏の出身でありながら、日本語の読み書きがほとんどできない外国籍の人々もいる。在日韓国人一世の中には就学経験が全く無い人もいる。また高齢になると日本語を忘れる人もいるという。残留孤児などの中国帰国者一世は成年になって日本に帰国したため、日本語能力が乏しい人も多い。帰国者一世は京都市内に100世帯ほどいるが、彼らはむろん、日本国籍の日本人である。しかし、家族以外との交流が少なく孤立しがちで、日本に帰りながら一般の日本人の暮らしがどのようなものかを知る機会のない人たちが大勢いる。

日本社会への貢献

日本に住む外国人の暮らしぶりは多様であるが、彼らは京都にさまざまな面で貢献している。市内の店舗でモノを購入し、交通機関を利用し、家賃を払い、仕事をし、家族を養うなど、人としての生活をとおして京都の経済に役だっている。仮に一人年間200万円を消費するとすれば、41,000人の外国人が京都で消費する額は800億円を越える。

彼らの貢献は単なる消費だけではない。インタビューで答えた人の中には、地域で母語を教え、日本人がネイティブスピーカーから語学を学ぶ機会を提供している人もいる。また大学で研究者として働く人、介護の仕事に携わる外国人もいる。一般に、日本で暮らす外国人は日本人以上のバイタリティーを持っている。日本人と異なる感性と見方で、地域社会で起業する人、あるときは地域活動のリーダーになって活動する人もいる。また自国に日本について紹介し、日本を積極的に海外に情報発信をしようとする外国人も多い。日本人が知らないところで、彼らは京都の生活を世界に情報発信している。

日本社会が閉塞感を増し、内向き志向が強まる中で、世界と京都を結びつける貴重な存在として外国人住民をとらえることができる。青年時代を京都で過ごした留学生は人生の宝物として京都での生活を胸に抱き続けるだろう。また、京都で定住している外国人には、京都を心から愛し、京都を自分のふるさと感じている人も多い。京都にとって彼らは、知られざる大きな財産であり、無限の可能性を持つリソースといえる。一般の市民が彼らの暮らしぶりに関心を示し、彼らと日々接する機会を増やすことが、彼らの京都に対する貢献をさらに飛躍させる大きな一歩になるだろう。

（めんじゅ・としひろ）

きょうと外国人支援ネットワーク
車座トーク

きょうと外国人支援ネットワーク（以下、支援ネット）は、京都府・滋賀県下に在住する外国人に支援やサービスを行なう団体や機関のゆるやかなネットワークとして、2006年9月から2か月に1度勉強会を開いています。今回、支援ネットはこのコミュニティ調査に協力し、インタビューに赴きました。さまざまな方たちから話を聞く中で、支援ネットの今後の活動の方向性や、コミュニティが抱える課題やニーズについても新たな発見がたくさんありました。

インタビュー先は、これまであまり接点のなかった団体がほとんどでしたね。
みなさんインタビューをしてみて、
それぞれの団体にどのような印象を持ちましたか？

思いを形にしていこうという時には、場、きっかけ、ツールが必要！

夕陽紅（シーヤンホン）は、今回のインタビューをきっかけに、思いが具体化し、活動開始につながったね。
自分の思いを言葉にして、人に伝えることで活動目標がはっきりしたみたいで、2012年の春からは、帰国者高齢者のための介護予防教室を定期的に実施するようになりました。

外国人女性の会パルヨンは、関わっている人の国籍が多様で国際色豊か。だからこそ難しい部分もある。会の運営のために、とくに事務的な部分をサポートできる日本人協力者が増えると良いなぁ。

夕陽紅が活動立ち上げに成功したのは、助成金をもらえていることが大きいね。お金と場所は大切だよね。そして、その活動を理解してサポートしてくれる人の存在が貴重なのかも。

留学生を中心にしたコミュニティでは、インターネットの活用が印象的だったなぁ、時代を感じた。メーリングリストの活用やスカイプでコーランを読んだり、情報交換や交流のツールとして活用されていた。

教会の関わりについては新しい発見。これまでの固定観念を変えていかないと、と思った。「宗教だから……」ではなくて、いい関わり方を探っていきたいですね。
清掃活動等をしている教会もあったけど、地域とはあまりつながっていないみたいで残念でした。

ロシアのクラブ京都の活動は手作り感に溢れてたなぁ。活動後のお母さんたちの交流があることが、すごく良かった。
子どもの母語習得だけでなく、お母さんたちの情報交換や悩みを話す場にもなっていた。でも、中心メンバーが少なくて、たいへんそう。なにか支援があれば、もっと発展していくんと違うかなぁ。

日本で暮らす外国人の方にとって、教会の存在がこんなに大きいことにも初めて気づいた。教会は生活をまるごと受け止めてくれる場所になってるって気がした。
PAG-ASAも宣教教会も京都インマヌエル宣教教会もそうやったね。

活動を支えるサポーター 必要とされるサポーター

コミュニティが活動を維持するには、いろいろなサポーターが必要。どこのコミュニティも会場、資金確保、事務的なことは悩みの種のよう。

コミュニティの自主性や気持ちを尊重し、活動を支えるサポートができる日本人はもっといるのでは？

子どもの教育と地域のつながり

子どもの教育は、どのコミュニティにも共通してみられる課題。関西フランス学院では、「日本式とフランス式の両方を」をめざして保護者が頑張っておられた。廃校になった小学校を利用されているのはユニーク。
しかし、地域の学校ではないので、地域とのつながりはあまり無いみたいで残念。

「多様性の尊重と受容」は、より多くの人が自分らしくいられることにつながる、気持ちの良いこと。

日本で暮らす外国人こそ、こうしたケアワークの多様性を発揮して活躍できる人材だけれど、まだまだハードルは高い。仕事に就く資格の取得や求職活動等にも支援が求められるね。

エルファを訪問して、外に開かれた施設にしようとする職員さんの実践と意識が印象に残ったなぁ。今では在日コリアンだけでなく、ニューカマー、日本人の利用者もいるんだって。ケアワーカーにも「多様性」という視点が必須になると実感した。

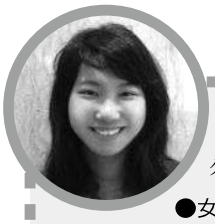
**京都には、約41,000人の外国人が暮らしていて、
私たちが気づかないところで、それぞれのニーズや
バックグラウンドによって形成されている外国人コミュニティがありました。
外国人支援ネットとしても、
もっといっしょに何かできることを探していきたいですね。**

世界から京都へのひとことメッセージ
@ kokoka

今回の調査で取り上げたほかにも、京都にはさまざまな外国人コミュニティと、そこに暮らす人たちがいます。もちろん、旅行者として京都を訪れる外国人の数も少なくありません。そんな方がたの目に、京都はどのように映っているのでしょうか。インターンとして京都市国際交流協会で働いたラファエラさんが、kokoka京都市国際交流会館を訪れた皆さんから「京都へのひとこと」メッセージを集めてくれました。

●性別／出身／京都でしていること
★京都へひとこと

私はラファエラ・ネイザーと申します。ドイツ出身で、ベルリンの大学で日本学を勉強しています。2012年の4月から7月まで、京都市国際交流会館でインターンシップを経験しました。今回は、京都市国際交流会館にいろいろな国から来た外国人の方にインタビューをしました。



NGUYEN Anh Bao Tram
グェン・アン・バオ・チャム

●女性／ベトナム／留学生
★和食が大好きです。納豆やごぼうや油揚げなどです。外国人学生にもアルバイトの機会がたくさんほしいです。

Dominique LAMURE
ドミニク・ラミュール

●男性／フランス／ヨガの先生・マッサージ師
★京都と鴨川と桜の季節と紅葉の季節が大好きです。それに京都の市民も大好きです。
日本語をうまく話すことができないのを残念に思っています。だから日本人と、経験をあまり分かち合えません。

John NILES
ジョン・ナイルス

●男性／アメリカ／英語の先生・キリスト教の布教者
★日本の文化と生活を楽しんでいます。それに人びとと知り合って、日本について勉強できるので、英語を教えることも楽しんでいます。私は京都が大好きです。町を美しくするためにされている、すべてのことはすばらしいです。さらに美しさを高めることを続けてください。

Alexander SAUTHOFF
アレキサンダー・サートホフ

●男性／ドイツ／造園家
★京都は「文化の首都」で、庭とお寺がたくさんあるので、本当におもしろい町です。京都では狭い空間を美的に、実用的に利用することへのインスピレーションが受けられます。
京都の市民は親切で、それに自然はきれいです。

Jean-Sebastien MAYRAND
ジャン＝セバスチャン・マイランド

●男性／カナダ／留学生
★京都は壮大な町で、観光客にとって目をひくものがたくさんあります。たとえば神社や美術館、博物館などです。でも京都の草ば「チクチク」しすぎるので、それが好きじゃありません。
京都の人には、英語を話すことを恐れないでほしいと思っています。英語が上手になるためには、間違いをしても大丈夫です。だから地図を見ながら困っている外国人を見かけたら、恥ずかしがらないで手伝ってください。

Darda INNOCENZI
ダーダ・インノチェーンツィ

●女性／イタリア／ホテルの受付係
★日本の中で京都は一番きれいな町です。でも京都で仕事を見つけるチャンスは少ないです。外国語の先生のような仕事以外、あまりありません。

Edwardo ESCALANTE
エドゥアルド・エスカランテ

●男性／メキシコ／旅行者
★京都には、ゴミ箱やベンチや公園がもっと必要だと思います。でも京都市はきれいで、バス網はとても便利です。
柔軟な態度を保ってください。規則はあなたたちが思っているようなほど大切ではありません。

Perrin LINDELAUF
ペッリン・リンドロッフ

●男性／カナダ／英語の先生・ナショナルジオグラフィックの仕事をしています
★京都にきれいな地区があると思いますが、京都市は伝統的な建築をもっと守ればいいのです。京都の都心はもう他の町と同じみたいです。私たちは京都の特徴を守らなければなりません。

田村 繁国
タムラ・シゲクニ

●男性／中国、黒竜江省（ロシアの隣）／kokoka京都市国際交流会館で日本語の勉強をしています
★ここ（kokoka京都市国際交流会館）がとても好きです。嵐山が大好きです。山と川はとてもきれいです。嵐山の下の橋はすごいです。でも道は狭いです。

林 載思
イム・ジュウン

●女性／韓国、ソウル／主婦
★京都はとても好きな場所です。だからその環境をよく守ってください。

Regina RILLO
レジナ・リッロー

●女性／アメリカ／京都で働いています
★私は日本についてもっと勉強したいと思っています。そのために、京都は一番いい所だと思います。皆さんはとても親切で、いつも助けようとしてくれます。

Karl JANSMA
カール・ジャンスマ

●男性／アメリカ／京都で一般的な生活をしています。目的は人びとを助けること、役に立つことです。
★京都の一番良いことと同時に一番悪いことは天気です。良いお天気ならすばらしいですが、悪い天気なら、とてもめんどくさいです。
私はきれいな景色と自然がぜんぶ好きです。それにきれいで古い建築も好きです。たくさんの興味をそそる神社や、緻密な装飾がついた寺があります。一言で言えば京都ばすばらしい」です。

鄭 立紅
テイ・リツコウ

●女性／中国、河北省／主婦
★京都は古い歴史がある町で大好きです。kokoka京都市国際交流会館で日本語の勉強の場所をいただいて、心から感謝しています。

Nesia MILUTIN
ネシア・ミルチン

●女性／ルーマニア／旅行者
★京都はきれいな町です。でも、レストランにフォークとナイフが欠けていると思います。それに若干の所で英語の説明も欠けています。もっと英語の説明が必要だと思います。

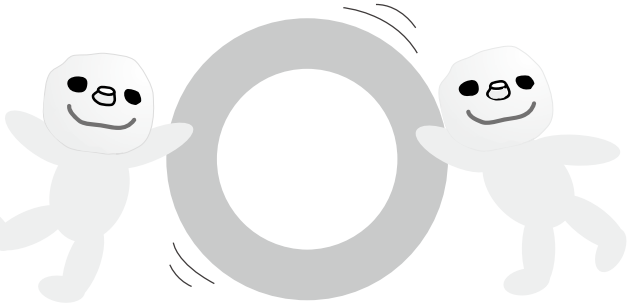
Mari KOLEHMAINEN
マリー・コーレマイネン

●女性／イギリス（母国はフィンランド）／留学生
★皆さんはとても親切なので、生活しやすいです。だから私ばありがとう」と言いたいです。

ARAKI Melody Jean
アラキ・メロディー・ジーン

●女性／フィリピン／京都で結婚生活を送っています
★京都は古い町なので、とても好きです。

世界からやって来た あなたの身近なお隣さん！

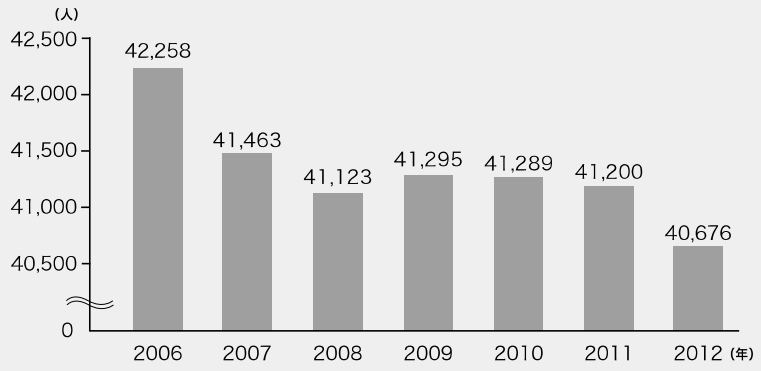


京都市の 外国籍の住民基本台帳登録者数

出典：京都市国際化推進室（単位：人）
2012年12月現在

国籍（出身地）	登録者数
韓国	22,121
中国	9,486
朝鮮	1,882
米国	951
フィリピン	881
台湾	665
タイ	369
フランス	358
英国	322
ベトナム	293
インドネシア	286
インド	248
オーストラリア	221
ドイツ	200
ネパール	199
カナダ	196
ブラジル	145
ロシア	136
マレーシア	116
イタリア	106
スウェーデン	81
スペイン	76
エジプト	73
モンゴル	71
ペルー	65
ニュージーランド	64
イラン	60
バングラデシュ	48
ミャンマー	41
スイス	38
メキシコ	38
シンガポール	36
フィンランド	36
オランダ	33
スリランカ	32
ルーマニア	31
アフガニスタン	29
ベルギー	29
トルコ	28
ハンガリー	25
イスラエル	23
ウクライナ	22
パキスタン	22
アイルランド	21
ポーランド	20
デンマーク	16
南アフリカ共和国	16
カンボジア	15
キルギス	14
アルゼンチン	13
オーストリア	13
ブルガリア	13
ラオス	12
コロンビア	11
チェコ	11
チリ	11
ウズベキスタン	10
サウジアラビア	10
ケニア	9
ジャマイカ	9
シリア	9
ガーナ	8
ナイジェリア	8
ギリシャ	7
クロアチア	7
スーダン	7
トンガ	7
ノルウェー	7
ボリビア	7
アゼルバイジャン	6
トルクメニスタン	6
ポルトガル	6
モロッコ	6
リトアニア	6
アンゴラ	5
エチオピア	5
スロバキア	5
タンザニア	5
マリ	5
アルジェリア	4
イエメン	4
カメルーン	4
グルジア	4
コンゴ民主共和国	4
ザンビア	4
パラグアイ	4
ベネズエラ	4
ベラルーシ	4
イラク	3
ウガンダ	3
カザフスタン	3
セネガル	3
ドミニカ共和国	3
ホンジュラス	3
マケドニア旧ユーゴスラビア共和国	3
マダガスカル	3
ヨルダン	3
リビア	3
東ティモール	3
アイスランド	2
ウルグアイ	2
エクアドル	2
キューバ	2
スロベニア	2
セルビア	2
セルビア・モンテネグロ	2
チュニジア	2
ニカラグア	2
バーレーン	2
ブルキナファソ	2
ボツワナ	2
モルドバ	2
ルクセンブルク	2
エストニア	1
エルサルバドル	1
オマーン	1
ガボン	1
ギニア	1
キプロス	1
グアテマラ	1
クウェート	1
コスタリカ	1
ジブチ	1
ジンバブエ	1
スワジランド	1
セーシェル	1
ソロモン	1
ニジェール	1
パプアニューギニア	1
パレスチナ	1
ブルネイ	1
ボスニアヘルツェゴビナ	1
マラウイ	1
モザンビーク	1
ラトビア	1
リヒテンシュタイン	1
レバノン	1
無国籍・未確定	27
合計	40,676

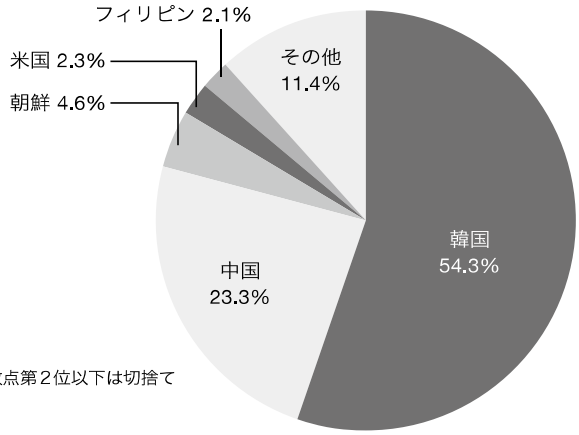
過去７年間の外国人登録者数の推移



※外国人登録制度は平成24年7月に廃止

京都市の 住民基本台帳登録者数国籍別構成比率

国籍(出身地)	人 数
韓国	22.121人
中国	9,486人
朝鮮	1.882人
米国	965人
フィリピン	881人
その他	4,676人



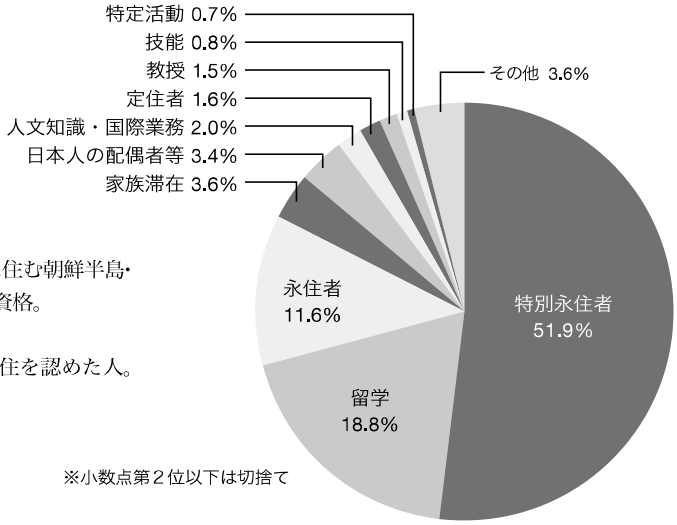
※小数点第２位以下は切捨て

京都市の 在留資格別住民基本台帳登録者数

「在留資格」とは、入管法で定められている27種類の法律上の資格のことで、外国人が日本に入国、活動するためには必要なものです。

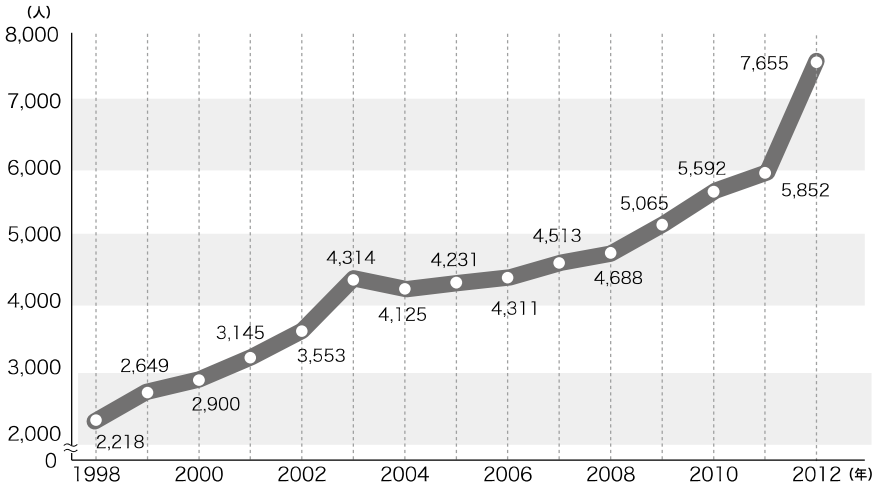
在留資格	人 数
特別永住者*	21,116人
留学	7,655人
永住者**	4,739人

*特別永住者
第二次世界大戦終戦(1945年)以前から日本に住む朝鮮半島・台湾出身者とその子孫に認められている在留資格。
**永住者
在留期間の長さなどを考慮して法務大臣が永住を認めた人。



※小数点第２位以下は切捨て

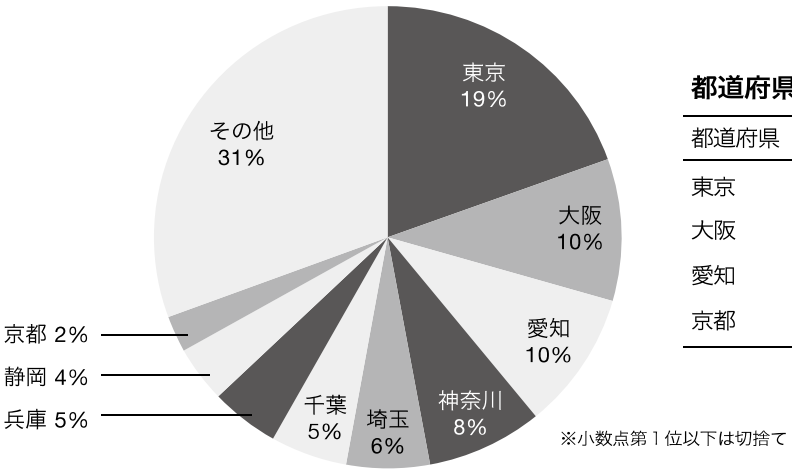
京都市の 留学生数の推移



(各年5月1日 現在)

日本の 外国人登録者数　2,078,508人

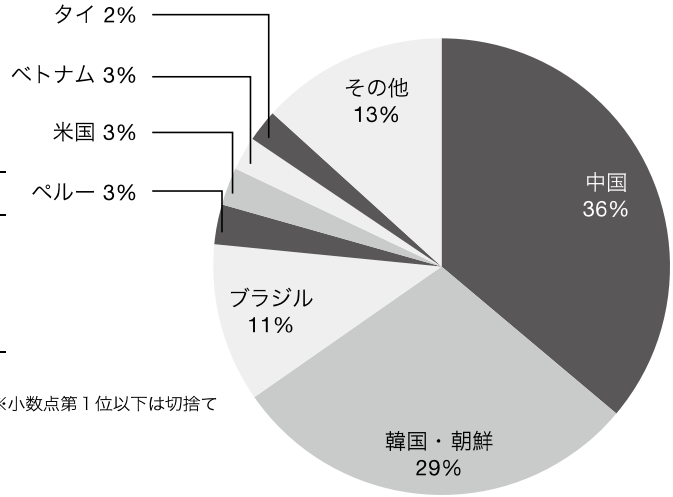
（出典：法務省 登録外国人統計2011年次）



※小数点第１位以下は切捨て

都道府県別外国人登録者数

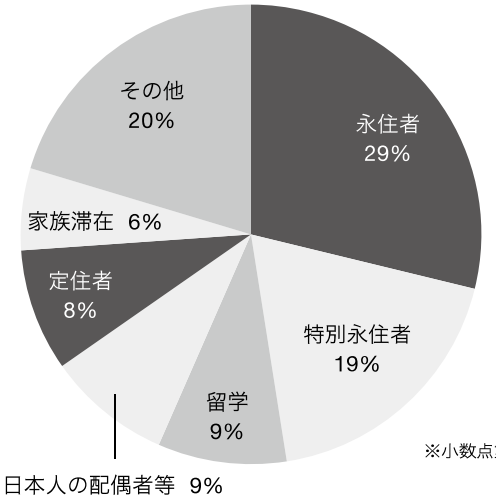
都道府県	人 数
東京	405,692人
大阪	206,324人
愛知	200,696人
京都	52,563人



※小数点第１位以下は切捨て

国籍別外国人登録者数

国 籍	人 数
中国	674,879人
韓国・朝鮮	545,401人
ブラジル	210,032人



※小数点第１位以下は切捨て

在留資格別外国人登録者数

在留資格	人 数
永住者	598,440人
特別永住者	389,085人
留学	188,605人

「つながり」の時代、再び
――あとがきにかえて――

公益財団法人 京都市国際交流協会 事業課
岡本 昌也

「コミュニティ」ばやりである。特に大震災以降、地域の再生、心の復興など様々な文脈で人と人との絆の大切さが謳われ、これでもかとメディアにあふれていたことは記憶に(もはや「記憶」か？)新しい。世間にこういった言葉が流布するのは、人が危機に直面し、独りでいることの脆弱さと向き合わざるを得ないときに集団的な防御機制が働くからだろうか。近代以降、特に第二次世界大戦後の日本では、この人と人との「つながり」、特に地域におけるそれを「都市化」の波とともにわずらわしいものとして切り捨ててきた経緯がある。

独りの方が気楽である、「個人」としての楽しみを追求したいと願望する人が増えた。何より個人がばらばらに消費行動をはじめると、いっそうモノを売る側が「儲かる」ので、そう仕向けてきたのが我々の住む高度資本主義社会だ。「個人(孤立？)生活」を奨励する商品があふれ、ライフスタイル、価値観が大きく変容する中、「つながり」、「絆」といった言葉は急速にリアリティを失っていった。マンガ・映画の「三丁目の夕日」的世界が、現実からノスタルジーに変容していく過程だったのかもしれない。

しかしながら、この20年近く、阪神・淡路大震災、そして今回の東日本大震災及び原発事故といった危機、不幸あるいはそれらに導かれる社会不安は、はからずも人と人とのつながりに再び一定のリアリティを与えたのではないかと思う。特に被災者、また放射能汚染地域からの避難者にとっては、人とのつながりの再構築こそが程度の差こそあれ、切実な課題に違いない。それらを見聞した――いや、共有すべき周辺の住民たる我々は「コミュニティ」の何たるかに思いを巡らし、意識しなかった、あるいは顧みなかった人と人とのつながりの回復に向けて手探りで歩み出しつつある筈だ。

閑話休題、本誌を手にとっていただいた方に、新しい発見や気づきがあればと切に願う。外国人、あるいは母語が日本語ではない人々は、社会的マイノリティといえる。彼ら、彼女らは「異文化」であるこの日本で、言語、習慣をはじめとする社会的圧力を常に感じながらどうにか折り合いをつけて過ごしている。この事実の一端に触れていただくとともに、皆さんと同じ「生活者」としての彼ら、彼女らに少しでも「共感」していただければ幸いである。

外国人がおのおのの出身国、文化、宗教などを共通項とする仲間と相互扶助の関係を構築しようとするのは、マイノリティゆえの心もとなさを物心両面で支えあうためと言える。ひるがえってこの日本社会は、たんに彼らを保護されるべき弱者、異質な他者と捉えるのではなく、ともにこの社会を支える仲間と捉え、手を携えていく術を模索できないだろうか。異質なものを包括できる懐の深さを具えた集団は、そうでない集団より効率は悪くとも全体としての危機回避(リスク・ヘッジ)能力が高くなるという。全体が集団ヒステリー状態になり、間違った方向に進もうとするときに集団内部の「異分子」が警告を発し、結果、調整がきくというのだ。

また、従来物質的豊かさと効率の追求を是としてきた戦後日本社会の中で見失いつつある人どうしのつながりや、冒頭の段で述べたように様々な危機と不安に直面して改めて目を向けつつある「(地域)コミュニティ」再構築を考えるときに、在住外国人のコミュニティに寄せる思い、その「たくましさ」には学ぶべきもの、我々が取り戻すべきものが多々あるのではないだろうか。

(公財)京都市国際交流協会は1989年の設立であるが、京都地域の在住外国人コミュニティの調査および直接取材に本格的に取り組んだのは今回が初めてである。本冊子の趣旨は一般の日本人市民と「外国人コミュニティ」との橋渡しをし、目指すべき理念としての多文化共生社会への歩み寄りの一助とすることであった。取材にあたり、各外国人コミュニティの方々には貴重な時間を割いていただき、またずいぶんと立ち入った事情にまで踏み込んでお話を伺うことができた。心より感謝申し上げる。

そして協働いただいた「きょうと外国人支援ネットワーク」の皆さんには、取材先の選定など企画段階からの貴重なご提案とともに、当協会職員の協同取材者としてフットワーク軽くご参加いただき、インタビューは大変立体的なものとなった。この枠組みなくしては今回の取り組みの結実はなかったと言ってよい。

また、佐伯さん、山崎さんをはじめとする京都通信社の皆さんには、テーマに深く関心を寄せていただき、企画段階からプロの視点からの貴重かつ様々なアイデアを頂いた。取材同行をはじめ、構成、装丁など、完成品を念頭においたご助言、そして進行を担う当協会と気長に付き合ってくださった賜物として上梓の日を迎えることができた。

本企画全体を俯瞰する素晴らしい前書きをお寄せくださった日本国際交流センターの毛受先生をはじめ、改めて関係各位に深謝するしだいである。

インタビュー調査のようす

調査結果をもとに、支援ネットのみなさんと情報交換

インタビュー参加者

きょうと外国人支援ネットワーク

飯田奈美子（多言語コミュニティ通訳ネットワーク）
Eni Lestari（An-nisa shalihah）
岡 祐里子（京都YWCA APT）
児嶋きよみ（Office Com Junto）
谷口沙織（立命館大学）
許 之威（京都大学）
南 珣賢（NPO法人京都コリアン生活センターエルファ）
牧田幸文（福山市立大学）

京都市国際交流協会

岡本昌也
髙木 聡
チョン・チャングン
野田由美
濱屋伸子
溝口智子

京都通信社

協力

宮内英价（京都小栗栖日本語教室）

「京都地域外国人コミュニティ基礎調査」報告書
ホンネを聞かせて！
あなたと仲間のキョウトぐらし

編集・発行
公益財団法人京都市国際交流協会

2013年2月23日　発行

制作協力　京都通信社

＊本事業は、財団法人自治体国際化協会「平成２４年度地域国際化
施策支援特別対策事業」の助成を受けて実施しました。